

宮城県文化財調査報告書第 143 集

# 上野館跡（ ）

- 平成2年度発掘調査報告 -

平成 3 年 3 月

宮 城 県 教 育 委 員 会

## 序 文

宮城県松山高等学校は、近世仙台藩で一族の家格を持つ上級武士茂庭氏の居館であった上野館の地に建っております。校舎は昭和26年に松山中学校として建てられたもので、40年ほど経て著しく老朽化したため、このたび鉄筋コンクリートの校舎に新築することにいたしました。

建設地については、この地が上野館の跡であることを考慮して種々検討いたしましたが、他に適地が選定できなかつたことや、昭和26年の松山中学校建築の際の大規模な造成工事により遺構が壊滅していることが予想されたことなどから、現在の敷地内に求めることになりました。

昭和63年度に遺構の遺存状況を確認する調査を実施したところ、掘立柱建物跡などの遺構が場所によっては良好に残っていることが明らかになり、校舎は遺構の密度が希薄な地域を選定して建設することになりました。

また、平成元年度には校舎建設に係る部分の調査を行い、文献等の記録では知り得ない館の変遷が明らかになっております。

今年度は校舎周辺の設備関係施設に係る調査を行い、これまでに類例の少ない肥前産の陶器や焼き塩を作る際に使用された素焼きの壺など、上級武士の生活の一端を示す貴重な遺物が出土しております。

本報告書が社会教育の資料として広く活用されることを願うとともに、調査に協力をいただいた松山町教育委員会並びに炎天下で直接発掘作業にあたられた方々に対して厚く感謝の意を表するものであります。

平成3年3月

宮城県教育委員会 教育長 **大立目 謙直**

# 目 次

## 序 文

1. はじめに	1
2. 調査の方法と経過	2
3. 発見された遺構と遺物	3
D - 1 区	3
D - 2 区	12
D - 3 区	27
D - 4 区	29
D - 5 区	37
D - 6 区	38
4. 考 察	39
(1) 記録に見られる上野館跡	39
(2) 発見された遺構について	39
(3) 出土遺物について	43

## 引用参考文献

# 例 言

1. 本書は宮城県教育庁が計画した宮城県松山高等学校校舎新築に伴う、上野（うわの）館跡の第4次発掘調査報告書である。
2. 調査は宮城県教育委員会が主体となり、文化財保護課が担当した。
3. 発掘調査および整理・報告書作成にあたっては、次の方々から多くの指導・助言を賜った(敬称略)。  
人間田宣夫（東北大学教授）岡村道雄（文化庁記念物課調査官）
4. 本書における土色・土性、陶器の色調についての記載には「新版標準土色帖」（小山・竹原：1973）を利用した。
5. 本書は文化財保護課職員の検討を経て、手塚均が執筆・編集した。
6. 発掘調査の記録や整理に関する資料および出土品については宮城県教育委員会が保管し、求めに応じて公開している。

# 調 査 要 項

1. 遺 跡 名；上野館跡（宮城県遺跡地図地名表登録番号 32007、遺跡記号 KN）
2. 所 在 地；宮城県志田郡松山町千石字松山 1 - 1
3. 調査面積；約 2100m<sup>2</sup>
4. 調査期間；平成 2 年 7 月 10 日～10 月 18 日
5. 調査主体；宮城県教育委員会
6. 調査担当；宮城県教育庁文化財保護課  
白鳥良一、手塚 均、小村田達也、大和幸生、佐藤憲幸  
松山町ふるさと歴史館  
井口裕二
7. 調査協力；宮城県松山高等学校、松山町教育委員会、茂庭邦元、菊池 亮、青木祐慶、及川 寛、高橋末市、宮澤忠治、及川安治、円田幸男  
及川昭子、本間ゆみ子、円田みよ子、鈴木志満子、小玉富子、佐藤寛子、岩井富子

## 1. はじめに

上野館跡は志田郡松山町千石字松山に所在する近世仙台藩で一族の家格にあった茂庭氏の屋敷跡である。遺跡はJR東北本線松山町駅の西2.3kmの地点に位置し、町の北限を画して流れる鳴瀬川の南側を東西方向に延びる丘陵の北端部、鳴瀬川の形成した沖積地を望む標高37~39mの高所に立地している。遺跡の東側は比高差約25mの急崖であり、下位には足軽屋敷や町場のたたずまいが残されている。また南側は丘陵地で尾根や沢が複雑に入り組み、北~西側は比較的緩やかな傾斜で沖積地に続いている(第1図)。なお、本遺跡の歴史的環境や調査に至る経過については昨年度の報告書を参照していただくこととして(伊藤1990)、以下ではこれまで行われた調査の概略について簡単に触れておきたい。

発掘調査は宮城県松山高等学校の新校舎建設に係わるもので、昭和63年に遺構の遺存状



第1図 遺跡の位置

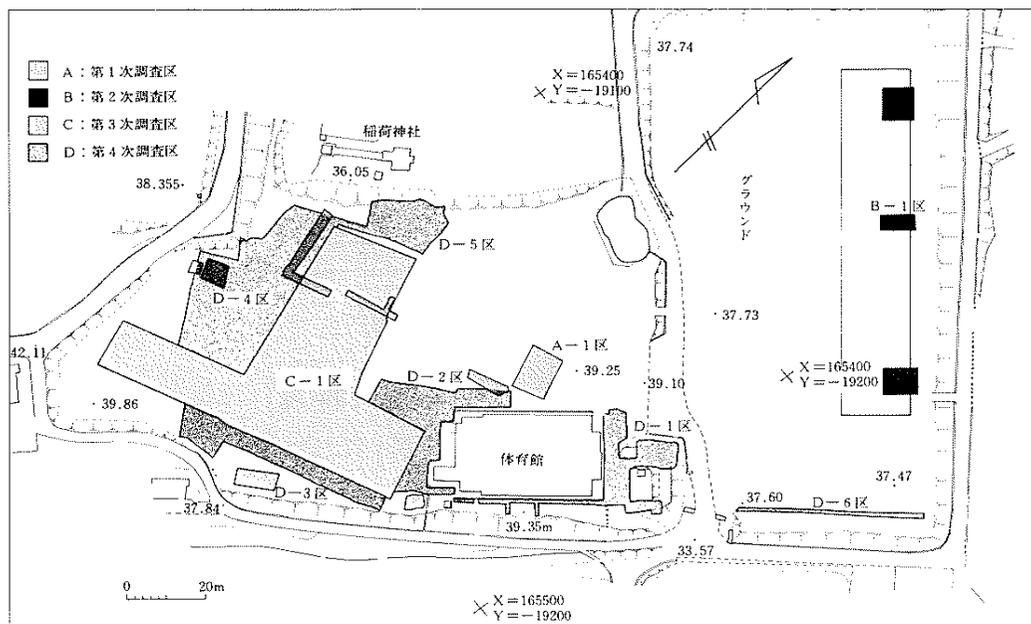
況を確認するための第1次調査を行い、平成元年には第1次調査の結果を踏まえ、第2・3次の事前調査を行っている（第2図）。

第3次調査は新校舎が建設される範囲が対象で、館の南寄りの部分にあたる。検出された遺構は掘立柱建物跡10棟以上、柱穴列1、打ち込み杭列1、溝跡16、土壌28、池跡2、通路跡2、炭窯跡1・整地地業などであり、掘立柱建物跡・土壌・池跡・整地地業には複数期の変遷が見られた。また、掘立柱建物跡・柱穴列の方向は館周りを方形に巡る道路の南脇に相当すると考えられるS X04通路跡および未調査であるがこれと並行して一部に小高く残っている土塁の方向とほぼ同様であり、屋敷内の建物配置が一貫して規則的に行われていたことが伺われた。

また、3次にわたる調査では丘陵の旧地形が西方向に向かって低く傾斜しており、この傾斜地を平坦な屋敷地とするために数回の整地地業を行い、建物を建て替えていること、さらに、中学校校地造成時に南・東側を大きく削平し、北・西側に盛土していることなどの地形の改変も明らかにされた。

## 2. 調査の方法と経過

今回の調査は上下水道工事・地下ケーブル埋設の電気工事・自転車置場など掘削を伴う設備関係施設予定地が対象である。これは大部分が第3次調査を行った新校舎予定地の周



第2図 調査区位置図

囲にあたる。調査区は第2図に示す6地区であるが(D-1~6区)、発掘調査が校舎建設工事と並行する形で進められたため、一部の調査区では工事工程に合わせて調査を進めるという方法を取らざるを得ず、同一地区を数回に分けて断続的に調査した所もある。

調査は平成2年7月10日に開始した。昨年度までの調査で遺構検出面までは盛土が行われていることが明らかになっており、はじめに重機を使用して遺構面までの盛土の除去を行った。盛土は30~80cmほどの厚さがあり、排土は4tトラックを使用して搬出した。

その後、各地区ともにケズリ作業を主に遺構確認を行い、遺構が密に検出されたD-1・D-2区では調査区全体に、他の地区では遺構が検出された部分を主に任意の基準線を設定し、3m単位のグリッドを組み、遺構の精査・図面の作成等を行った。調査面積は約2,100m<sup>2</sup>で、調査の終了は平成2年10月18日である。

以下、D-1区~D-6区の順で各地区ごとに発見された遺構・遺物についての記載を行っていく。なお、発見された遺構の方向については現存する絵図(写真図版1)に示された方位に合わせ、現在の校舎正門側を東としている。

### 3. 発見された遺構と遺物

#### D-1区(第3図)

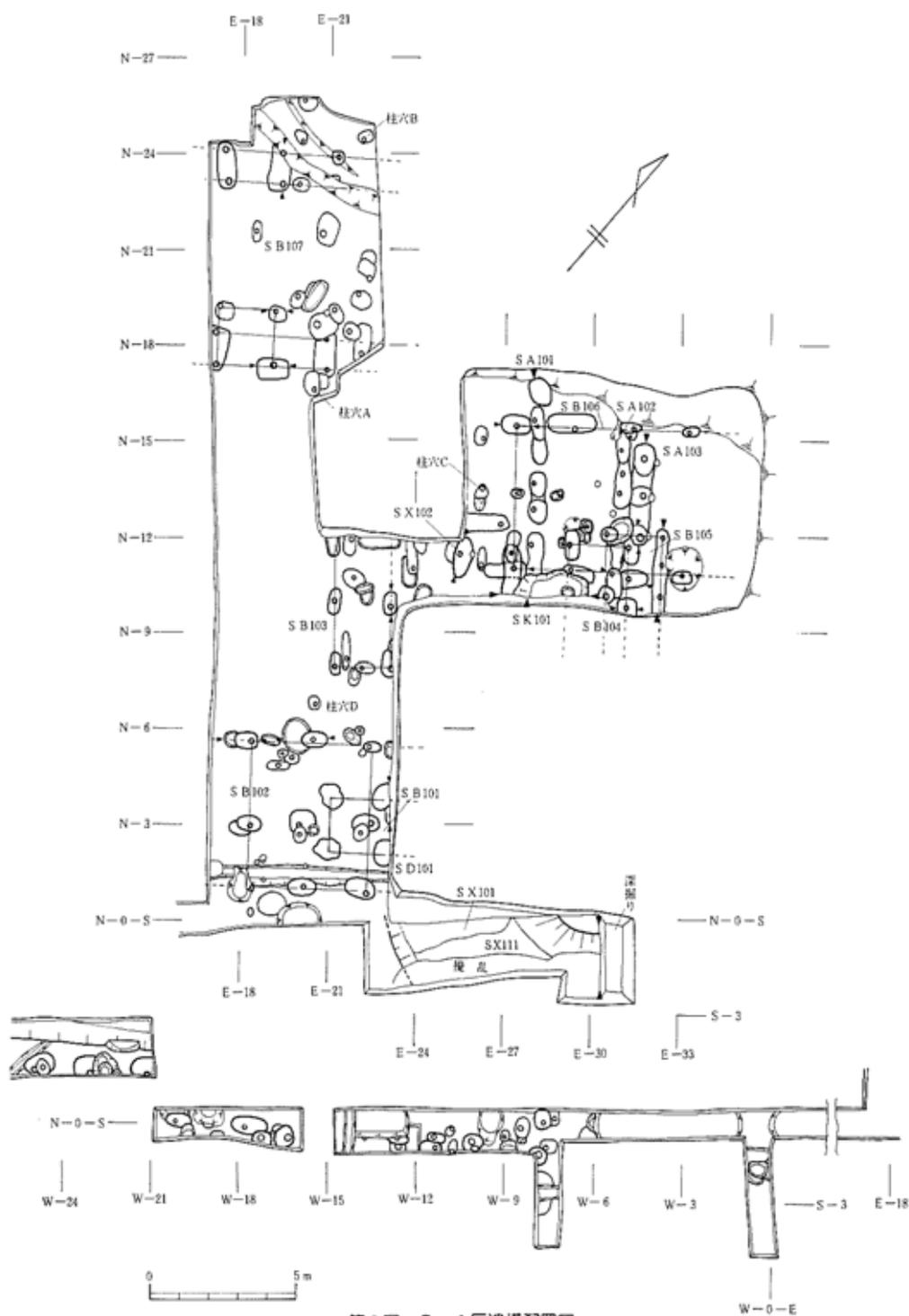
この地区は絵図(写真図版1)によると館跡の表門およびその周辺に相当する場所であるが、昭和26年の中学校建設や昭和28年の町の水道タンク埋設工事で大きな破壊を受け、特に調査区北側はグラウンド用地として調査区より1.5mほど低くまで削平されている。調査の結果、現地表面から約25cm下まで中学校造成時の盛土に覆われ、その下位に削平された地山面あるいは部分的に残る整地面が見られ、体育館東側の幅の狭い調査区では体育館の基礎工事によって1m以上の深さまで掘削されている部分も見られた。

#### 1. 発見された遺構

発見された遺構は礎石建物跡1棟、掘立柱建物跡7棟、柱穴列3列、土壌1基、溝跡1条、通路跡1条、整地地業、多数の柱穴などであるが、調査区が狭いこと、主たる部分が水道タンク等で壊されていることからいづれも中途半端なものである。

#### A. 礎石建物跡

【SB101 礎石建物跡】径約80~90cm・深さ10cm前後の不整形の浅い掘り方の中に拳大の石あるいは石の抜き取り痕が残るもので、4個が約2mの間隔で方形に検出された。礎石建物跡の根固め残痕と思われる。地山面で検出され、SB102 掘立柱建物跡と重複するが直接の切り合い関係はない。全体の規模は不明であるが北側に展開する建物跡と考えられる(第4図、写真図版2-1)。



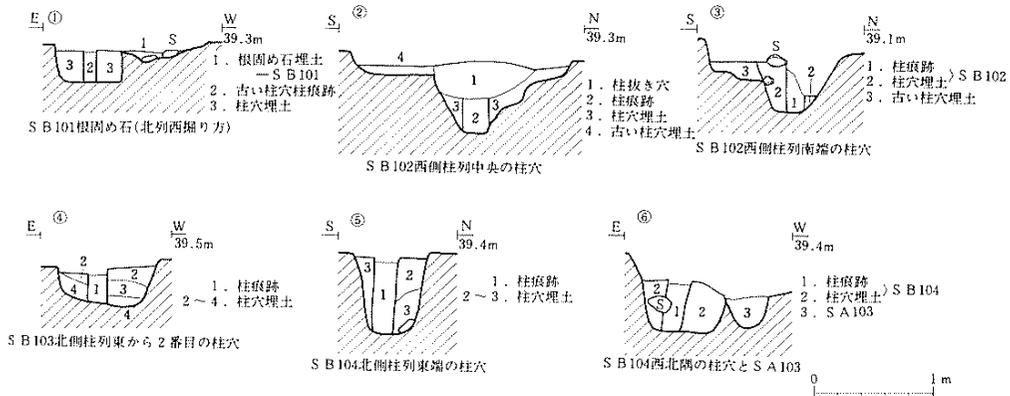
第3图 D-1区遺構配置図

## B. 掘立柱建物跡

【S B102 掘立柱建物跡】桁行2間以上・梁行2間の南北棟と恐れ、地山面で検出された。S B101 礎石建物跡・S D101 溝跡と重複し、後者を切っているが前者との新旧関係は不明である。柱間は桁行が2.1m等間、梁行は南から2.1・2.4mである。柱穴は桁方向に長い楕円形・隅丸長方形を呈し、長軸0.6~1m・短軸30~60cm・深さ50~70cmで、埋土は褐色シルトに地山ブロックが多量に混じっている。柱痕跡は径15~20cmの円形で、深さは40~70cmである。なお、数個の柱穴に柱の抜き取りあるいは切り取りの痕跡が見られた(第4図・)。北列中央の柱穴から寛永通宝が出土している(第8図16)。

【S B103 掘立柱建物跡】桁行2間以上・梁行1間の東西棟と恐れ、地山面で検出された。S B101 礎石建物跡と柱筋を揃え、その西側4.2mに位置している。柱間は桁行・梁行ともに1.9~2mである。柱穴は桁方向に長い隅丸長方形を呈し、長辺70~80cm・短軸35~40cm・深さは40~50cmで、埋土はにぶい黄褐色シルトに地山ブロック・小礫が多量に混じっている。柱痕跡は径15cmほどの円形で、深さは35~40cmである(第4図・)。

【S B104 掘立柱建物跡】3個の柱穴がL字状に並ぶもので地山面で検出された。南北および西方向への伸びは考えられず、東方向に展開する建物跡と考えられる。梁行は1間である。S B103 掘立柱建物跡の北側6mに位置しており柱筋を揃えることから、同規模の対になる建物跡の可能性もある。S B105・106 掘立柱建物跡、S A103 柱穴列、S K101 土壇と重複し、いづれにも切られている。柱間は桁行が1.9m、梁行が2mである。柱穴は桁方向に長い隅丸長方形を呈し、長辺90cm前後・短辺40~60cm・深さは70cmほどで、埋土はにぶい黄褐色シルトに地山ブロックが多量に混じっている。柱痕跡は径20cmほどの円形で、深さは70cmほどである(第4図・)。

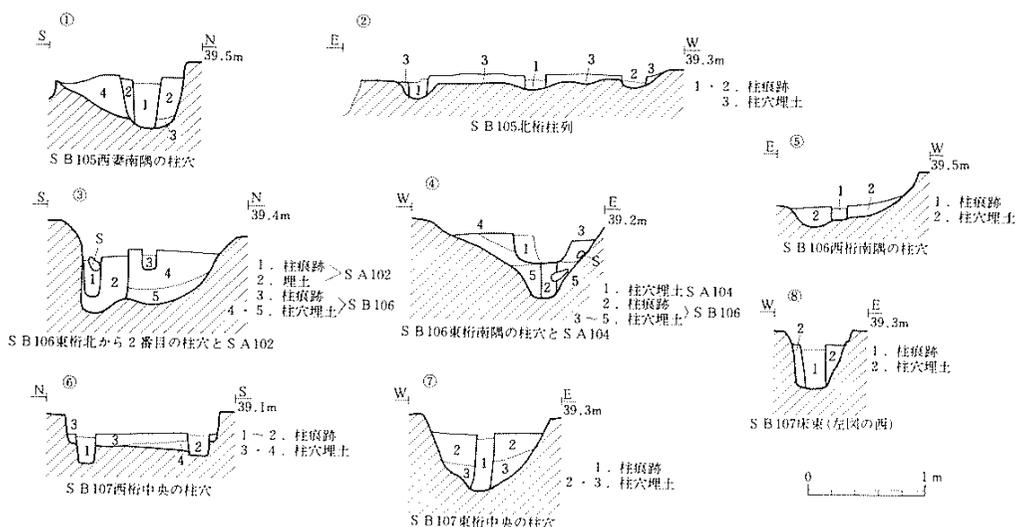


第4図 S B101~104柱穴断面図

【S B105 掘立柱建物跡】桁行1間以上・梁行1間の建物跡で東方向に展開すると考えられる。地山面で検出され、S B104・106 掘立柱建物跡、S A103 柱穴列と重複し、いずれをも切っている。柱間は1.9m等間で、北列では2間割りで西から0.9・1mである。柱穴は南列が径または長辺が50cmほどの不整形円形か楕円形で、深さが60cmほどであるのに対し、北列では長さ2.6m以上・幅40~50cmの布掘り状を呈している。深さは10cmほどで、柱痕跡部分がさらに5~15cm深くなっている。埋土は地山ブロックが多量に混じる褐色・暗褐色のシルトで微量の炭化物を含んでいる。柱痕跡は径15~20cmの円形で、深さは南列が60cmほど、北列は40cmほどである(第5図・ )。

【S B106掘立柱建物跡】桁行3間以上・梁行1間の南北棟で削平の著しい北側に延びる可能性もある。南妻の柱穴は整地面で、他は地山面で検出された。S B104・105掘立柱建物跡、S A101~103柱穴列・S K101土壌・S X110整地地業・S X102柱穴と重複し、S B104・S A101・S X110を切り、S B105・S A102・S K101・S X102に切られるが、S A103との新旧関係は不明である。柱間は桁行西列で南から1.9・2.0・1.9m、東列で南から1.9・2.0・1.8m、梁行は4.5mである。柱穴は桁方向に長い楕円形を呈し、長軸が0.6~1.6m・短軸が30~50cm、深さは東列が70cmほど、西列では40cmほどである。埋土は地山ブロックが多量に混じる褐色のシルトで微量の炭化物を含んでいる。柱痕跡は径15cmほどの円形で、深さは40~70cmである(第5図 ~ )。

【S B107掘立柱建物跡】地山面で検出した。検出された部分では桁行2間以上・梁行1間の南北棟であるが、より規模の大きな建物跡の一部である可能性も考えられる。柱間は桁行が1.9m等間、梁間が6.6m・6.7mである。柱穴は長辺が1.1~1.3m・短辺が60~70



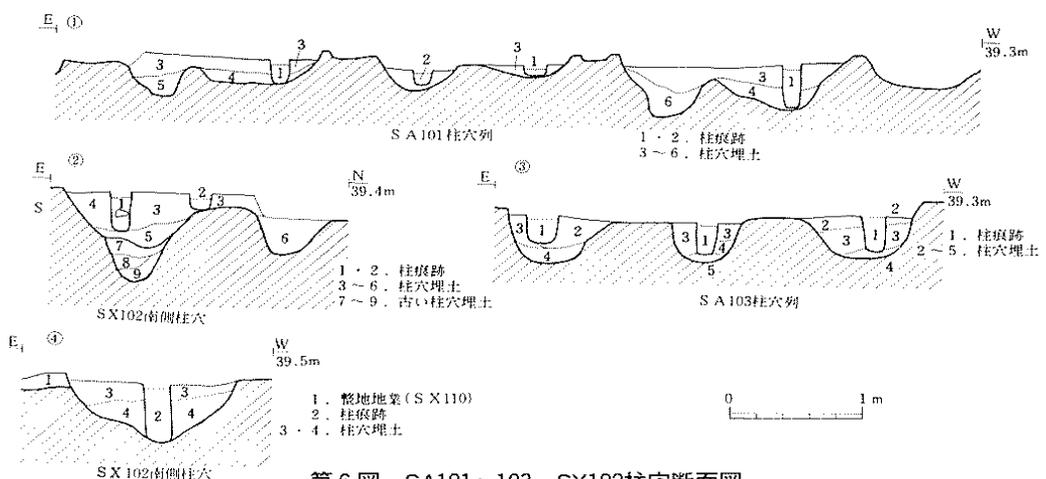
第5図 S B105~107柱穴断面図

c m、深さが40～70 c mの隅丸長方形を呈し、東桁中央の柱穴を除くと1個の柱穴中に90 c mの間隔で2個の柱痕跡が見られる。内側の柱痕跡は床束的なものであり、東傾桁列から1.7～1.9mに並ぶ柱穴も同様のものと思われる。これは一辺あるいは長軸が50～60 c mの隅丸長方形あるいは楕円形で、深さは50 c mほどである。柱穴埋土はいずれも地山ブロックが多量に混じる褐色・暗褐色のシルトで微量の炭化物を含む。柱痕跡は径15～20 c mの円形で、深さは40～70 c mである(第5図～)。西桁南隅の柱穴から灯明皿(第8図11)が、東桁中央の柱穴柱痕跡から寛永通宝(第8図17)が出土している。

### C. 柱穴列

【SA101 柱穴列】東西方向に延びるもので、地山面で検出された。SB106 掘立柱建物跡・SK101 土壌に切られている。柱穴は長さ1.6～1.9m・幅30～65 c mの東西に長い布掘り状のもので、4個が連続しており、さらに東西に延びるものと思われる。各々の柱穴からは0.9～1mの間隔で径15 c mほどの円形の柱痕跡が認められた。柱穴の底面は凹凸が激しく柱埋設部分が25～40 c mで深くなっている。埋土は黄褐色の地山ブロックが主体で、小礫が混じっている(第6図)。

【SA102 柱穴列】SA101 柱穴列と並行するもので、地山面で検出された。SB104～106 掘立柱建物跡・SA103 柱穴列と重複し、SB104・106・SA103より新しく、他より古い。柱穴は長さ約2.0～2.5m・幅30～65 c mの東西に長い布掘り状のもので2個が連続しており、さらに東西に延びるものと思われる。西側の柱穴で約60 c mの間隔を置いて径15 c mほどの円形の柱痕跡3本が見られた。柱穴の底面は柱埋設部分が深く50～70 c mである。埋土は黄褐色の地山ブロックが主体である。(第6図)。柱穴から外面にナデ調整がある丸瓦小片が出土している。



【S A103柱穴列】S A102柱穴列と並行するもので、地山面で検出された。S B104~106掘立柱建物跡・S A102柱穴列と重複し、S B104を切り、S B105・S A102に切られるが、S B106との新旧関係は不明である。柱穴は長さ約3.2m・幅70cmほどの東側に長い布掘り状を呈し、西から1.25・1.3mの間隔をおいて3本の柱痕跡が見られた。柱穴の底面は柱埋設部分が深く50~60cmである。埋土は暗褐色・黒褐色のシルトに多量の地山ブロックが混じっている(第6図)。

#### D. 柱穴

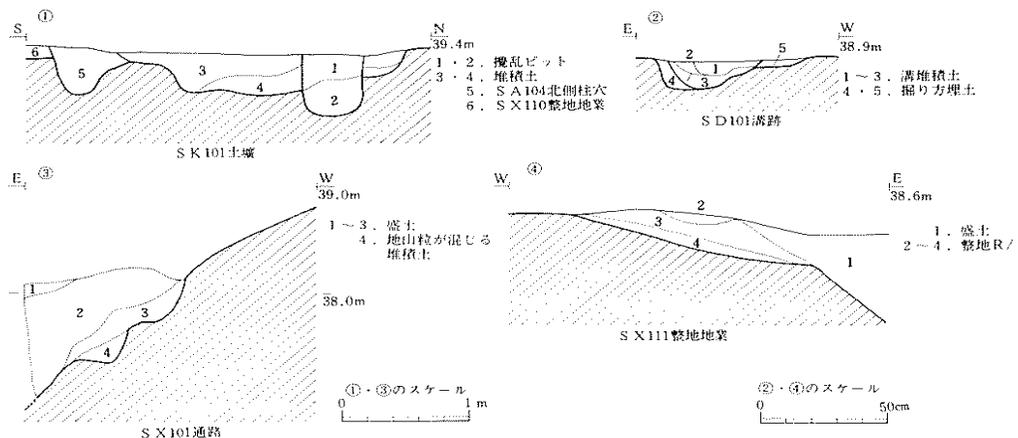
【S X102柱穴】長軸1.2~1.5m以上・短軸60cmほどの楕円形で、深さが55~60cmの2個の柱穴が1.7mの間隔を置いて南北方向に並ぶものである。S X110整地・S B106掘立柱建物跡を切り、S K101土壌に切られている。南北および西方向には組み合う柱穴がなく、東方向は攪乱で不明なため建物跡・柱穴列とは別に扱った。埋土は褐色のシルトで多量の地山ブロックと少量の炭化物・焼土を含んでいる(第6図)。

#### E. 土壌

【S K101土壌】S X102柱穴を切り、これまで述べてきた遺構の中で最も新しい。東側が攪乱を受けており全体の規模は不明である。残存する形状は長辺約2m・短辺約1m・深さ20~35cmの隅丸長方形である。地山ブロックを多量に含む褐色・暗褐色シルトで人為的に埋められており、層中からは摺鉢片・灯明皿(カワラケ)・軒平瓦片?・丸瓦片・煙管などが出土している(第7図・第8図12~15)。

#### F. 溝

【S D101溝跡】S B101礎石建物跡の東辺沿いを南北方向に走っており、地山面で検出された。S B102掘立柱建物跡に切られている。幅約50cm、深さ10~25cmで、約1m幅の



第7図 S K101. S D101. S X110.111断面図

掘り方をもつ。溝の壁面には部分的ではあるが10～20cm大の比較的扁平な河原石が貼り付いている部分や石の抜き穴などが認められ、これらは機能時の溝の肩を補強していたものと考えられる。溝の堆積土は上位では地山ブロックを主体としているが、下位では褐色・黄褐色の砂あるいは砂質シルトであった(第7図、写真図版4上)。

### G．通路跡

【S X101通路跡】S B101礎石建物跡・S B102掘立柱建物跡の北東側で検出された地山を掘り込む浅い溝状の遺構である。上幅で約6m・下幅で約4mを測り、右斜め方向(北東方向)から延びている。底面には地山の部分と整地された部分(S X111)がある。平坦部側の幅1.5mほどの狭い部分を調査しただけであり、また削平および攪乱が激しいために確証を得ないが、断面観察では階段状に地山を削り出している可能性が考えられた。東門に通じる通路と考えられる(第7図)。遺構面までは厚い盛土がなされており、盛土中から近世～現代までの陶磁器類・瓦類が多量に出土している(第8図4～9)。

### H．整地地業

【S X110整地地業】S A104柱穴列からS A101柱穴列西側の狭い部分に見られる地業である。S A101を覆い、S B106掘立柱建物跡・S X102に切られている。盛土は地山ブロックを多量に含む褐色土等で、厚さは最も厚い部分で10cmほどである。遺構の重複状況から見て、S B106に伴う整地地業と考えられる(第7図)。

【S X111整地地業】S X101通路跡の底面で検出された整地地業である。盛土は東側に向かって傾斜する地山上に3層が認められ、検出された部分の最大厚は20cmである。S X101通路跡構築に伴う整地地業と考えられる。

なお、以上の遺構以外にも多数の柱穴が検出されているが、これらについては調査区が狭いこともあって組み合わせが明らかではなく、ここでは記載を省略する。

## 2．発見された遺物

D 1区で発見された遺物としては磁器・陶器・土師器質土器(カワラケ)・瓦・煙管・銭貨などがある(第8図)。これらは大部分がS X101通路跡上の盛土あるいはS X101土壌から出土したものであり、掘立柱建物跡・柱穴列からの出土は少ない。

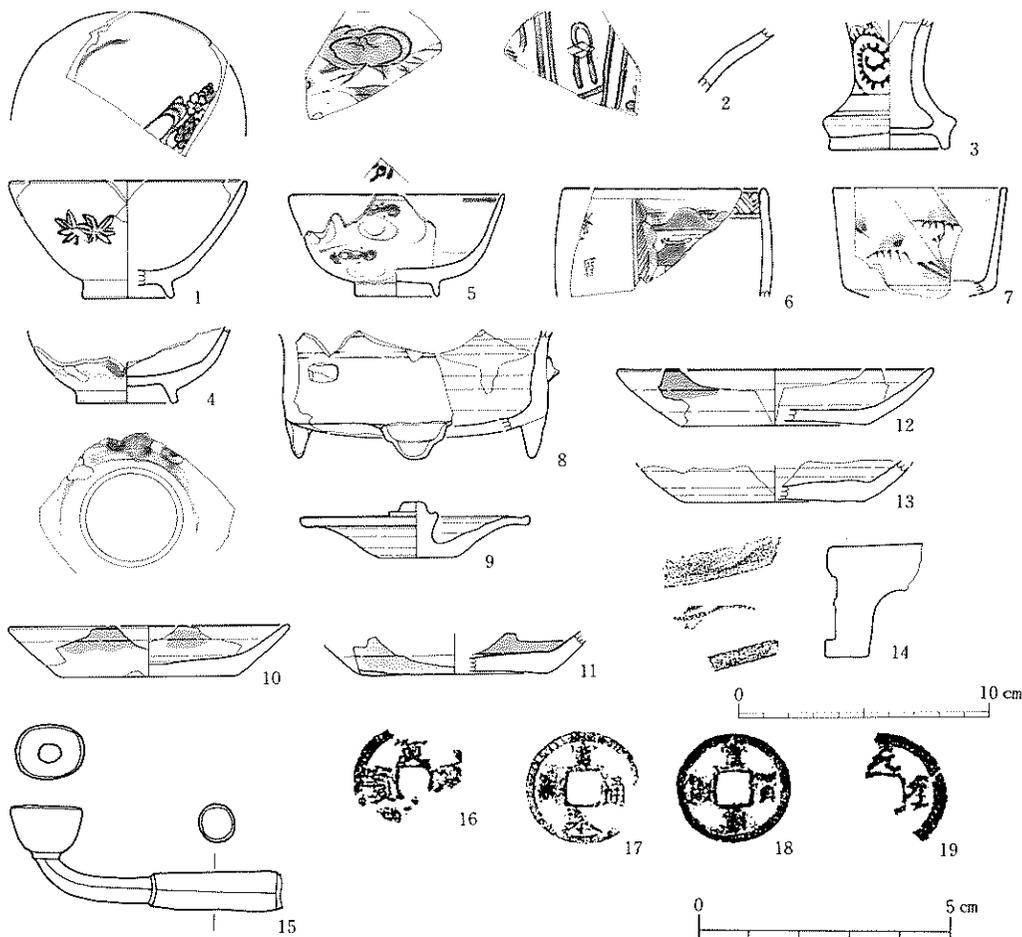
### a．磁器(第8図1～8)

1～7は染付、8は青磁である。1～3は柱穴出土。1は小型の飯碗で内外面にコンニャク印判による文様が描かれている。2は芙蓉手の大皿で外側面に繊細な牡丹文が描かれている。3は御神酒徳利で簡略化された蛸唐草文が描かれている。

4～8はS X101通路跡上の盛土から出土。4はくらわんか手の厚手の飯碗である。5～7は湯呑み碗で、5は丸型、6・7は筒型である。5の見込には簡略化された五弁花文

が描かれている。8は香炉で内面の体下部から底部を除いて釉が掛けられている。

これらはいずれも肥前産と思われる。1は18世紀代、2は17世紀後半、3~8は18世紀後半~19世紀の製品と思われる。



No	出土地区・層位	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特 徴	産 地	図版No
1	柱穴A掘り方	磁器飯碗	9.4	4.9	3.6	染付。外側面に紅葉印判。見込に梅花印判。	肥前	11-1
2	柱穴B掘り方	磁器大皿				染付。芙蓉手。外側面に牡丹文。細かな貫入あり。	肥前	11-2
3	柱穴C掘り方	御神酒徳利		4.8	(5.3)	染付磁器。外側面に銷唐草文、体下部・高台に圏線。	肥前	11-3
4	SK101 盛土	磁器飯碗		4.0	(3.2)	染付。外側面に草花文。細かな貫入。	肥前	11-4
5	SK101 盛土	磁器湯呑碗	8.5	3.4	4.2	染付。外側面に草花文？見込に五弁花の刷し文と2条の圏線。	肥前	11-5
6	SK101 盛土	磁器湯呑碗	8.2		(4.5)	染付。外側面に山水文。	肥前	11-6
7	SK101 盛土	磁器湯呑碗	6.9		(4.5)	染付。外側面に竹文。内面口縁部に2条、腰部に1条の圏線。	肥前	11-7
8	SK101 盛土	磁器香炉		10.5	(5.4)	青磁(色調:明緑灰567/1)。三脚か? 把手は破損。	肥前	11-8
9	SK101 盛土	陶器土瓶蓋	9.0	3.0	2.3	外面に5.5x黄楳10VR6/4の木灰釉。底部に回転糸切り痕。	大瀬相馬	11-9
10	柱穴D掘り方	灯明皿	11.2	7.0	(2.6)	土師質土器(かわか)。体部に不純物付着。底部に回転糸切り痕。		
11	SB107 柱穴掘方	灯明皿		7.4	(1.7)	土師質土器(かわか)。体部に不純物付着。底部に回転糸切り痕。		
12	SK101 堆積土	灯明皿	12.6	7.3	2.4	土師質土器(かわか)。体部に煤付着。底部に回転糸切り痕。		
13	SK101 堆積土	皿		7.1	(1.7)	土師質土器(かわか)。底部に回転糸切り痕。		
14	SK101 堆積土	軒平瓦?	瓦当幅 4.5cm、厚さ1.7cm			均整唐草文?		11-15
15	SK101 堆積土	煙管	銅製の雁首。火皿は楕円形で長軸1.4・短軸1.1・深さ1.1。肩付で補強帯あり。河骨形。					11-14
16	SB102 柱穴	銭貨	古寛永通宝。明暦2年(1656)以前の鋳造。初鋳年寛永3年(1626)。					11-10
17	SB107 柱穴	銭貨	古寛永通宝。明暦2年(1656)以前の鋳造。初鋳年寛永3年(1626)。					11-11
18	確認面	銭貨	古寛永通宝。明暦2年(1656)以前の鋳造。初鋳年寛永3年(1626)。					11-12
19	確認面	銭貨	元豊通宝。中国北宋時代元豊元年(1078)初鋳の渡来銭。銭字は篆書。					11-13

第8図 D-1区出土遺物

b．陶器（第8図9）

9は土瓶の平蓋でS X101 通路跡上の盛土から出土。径5mmの息抜き孔が穿たれ、底部に係切り痕を残している。釉は木灰釉で上面のみに掛けられ、貫入がない。大堀相馬産で19世紀代の製品と思われる。

c．土師質土器（第8図10～13）

カワラケと称される皿類で、10・11は柱穴から、12・13はS K101埋土から出土。体部には煤や不純物の付着が見られ、灯明皿としての使用が考えられる。

d．瓦（第8図14）

S K101埋土から出土した軒平瓦あるいは軒棧瓦の瓦当小片で、唐草文が配されている。なお、図示した以外にも丸瓦・平瓦・棧瓦の破片がS X101 通路跡上の盛土、S K101埋土から出土している。

e．煙管（第8図15）

S K101埋土から出土。火皿下の脂返しが大きく湾曲し、羅字に取り付く部分が一段太く巻かれた「肩付」のものである。火皿と首部の接合部には補強帯が巻かれている。「河骨形」とされる形態で17世紀前半のものとされている(小泉1983)。

f．銭貨（第8図16～19）

16・17は掘立柱建物跡柱穴から、18・19はS A101周辺の遺構確認面から出土。16～18は寛永通宝で、銭文が潤字で宝字の足がス宝であることから明暦2年(1656)以前に鑄造された古寛永に属するものと考えられる。19は渡来銭で、中国の北宋時代に作られた元豊通宝である。銭文は篆書で書かれている。

## D - 2 区

この調査区は第1次調査A - 1区の東側に隣接し、第3次調査C - 1区の北側に接続する狭い部分にあたる(第2図)。このため、検出された遺構はC - 1区で検出されていた遺構の一部を構成するものが少なくなく、新たに検出された遺構も部分的な検出に留まるものが多い。

### 発見された遺構と遺物

発見された遺構は掘立柱建物跡3棟、柱穴列2列、門跡1棟、竪穴状遺構2基、井戸跡2基、土壇4基、溝跡2条、炭窯跡1基、多数の柱穴などである(第9図)。なお、遺構番号が2桁の遺構は第3次調査で検出された遺構と同一の遺構を意味している。

発見された遺物には磁器・陶器・土師質土器・瓦質土器・焼塩壺・硯・瓦類・煙管・銭貨などがあり、竪穴状遺構から多く出土している。

### A. 掘立柱建物跡

【S B108 掘立柱建物跡】南北3間・東西1間が検出されているが、西側については遺構確認で止めている部分もあり全体の規模については不明である。建物跡周辺には整地地業が見られ(S X112)、これを切っている。柱間はほぼ1.9m等間である。柱穴は長軸0.8~1.1m・短軸50~90cm・深さ40~60cmで、埋土は褐色・黄褐色シルトに地山や凝灰岩の細かなブロックを多量に含んでいる。柱痕跡は径15~20cmの円形で、深さは35~45cmである(第10図 ~ )。

【S B06 掘立柱建物跡】桁行7間・梁行3間の南北棟で北妻の東側柱列が不明であったものである。今回の調査で北妻東隅の柱穴と東隅から2本目の柱痕跡が確認された。

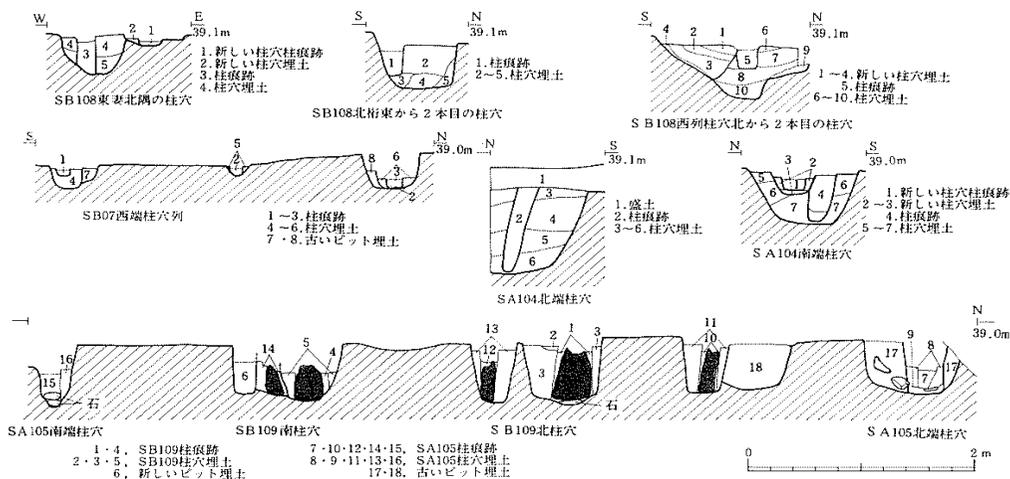
【S B07 掘立柱建物跡】桁行5間(1.75m等間)・梁行1間(柱間は2間分で4m)の室の西妻側を除く三方に廊下が取り付け、北側の廊下(幅1.6m)を隔てて2室以上が連なる規模の大きな建物跡と考えていたものである。今回の調査では建物の東妻が確認され、北側廊下がさらに西に3間分(北列は東から2.0・1.75・1.9m、南列は2.0・1.25・2.5m)延びることが明らかになったが、廊下を隔てた北側の室、西側に延びた廊下に対応する室については把握することはできなかった(第10図)。地山面で検出され、S X103・S X104竪穴状遺構に切られている。

### B. 柱穴列

【S A104 柱穴列】南北方向に2間分が検出されたもので、地山面の確認である。柱間は1.9m等間である。柱穴は長辺が1m前後・短辺が0.7m前後・深さは60~90cmで、埋土は暗褐色シルトに地山ブロックを多量に含んでいる。柱痕跡は径18~22mの円形で、深さは50~90cmである。折り返しの柱穴が不明なので柱穴列としたが、規模等からは掘立柱







第10図 SB108・109・07, SA104・105柱穴断面図

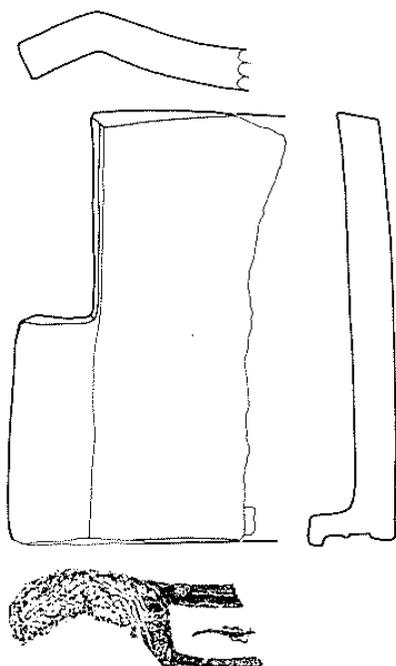
建物跡の可能性が考えられる遺構である(第10図・ )。

【SA105柱穴列】SB07掘立柱建物跡西辺の50cm西に位置し、南北方向に5個の柱穴が並ぶもので地山面で検出された。SB109門跡・SE104井戸跡に切られ、SX113整地地業が南側の2個を覆っている。柱間隔は1.9m等間で、炭化した柱材が残存していた。柱穴は一

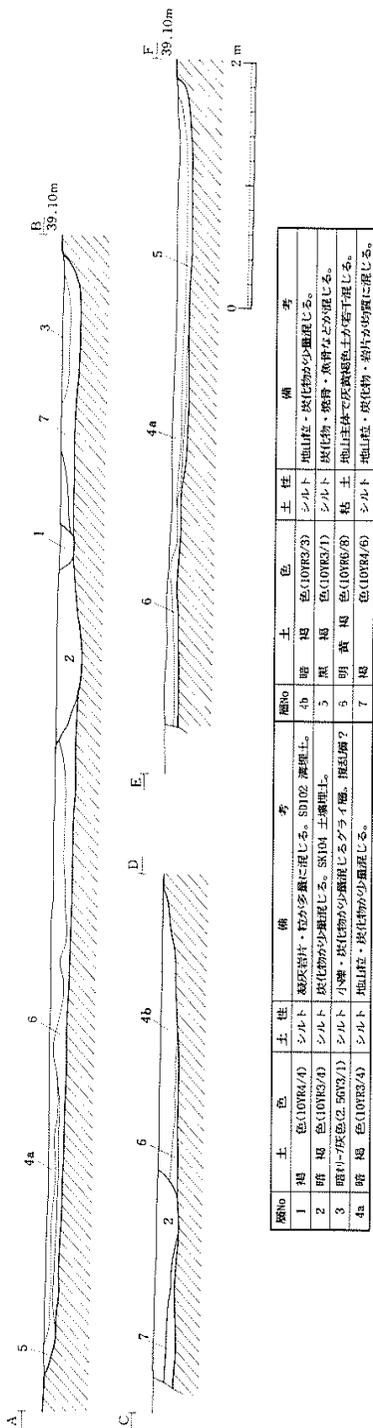
辺が35～40cmの不整隅丸方形で、深さは50～65cmである。埋土は褐色シルトに多量の地山ブロックが混入するもので、炭化物も少量見られた。柱は径が15cmほどの丸柱で、柱の下に沈下を防ぐための石が置かれているものもあった(第10図)。

### C. 門跡

【SB109門跡】2.4mの間隔を置いて2本の角柱が並ぶもので、整地地業(SX113)下の地山面で検出された。SA105柱穴列と同じライン上に並び、これを切り、SB07掘立柱建物跡の北側廊下の西端を挟むように位置している。柱穴は長軸が50～70cmの円形基調で、深



第11図 SB109出土遺物



第12図 S X 103 断面図

さは60 c mほどである。埋土は褐色シルトに多量の地山ブロックが混入するもので、炭化物も少量見られた。柱は一辺が30 c mほどで北側の柱の下には沈下を防ぐための石が置かれていた(第10図)。冠木門に相当する遺構と考えられる。南側柱穴埋土から軒棧瓦が出土している。

### 出土遺物(第11図)

平瓦部の瓦当面に唐草文が配されているが、丸瓦部の瓦当面は破損しており瓦当文様は不明である。法量は長さが24.5 c mで、左側縁に尻から12 c m・幅4 c mの切り込みがある。棧瓦は妙心寺庫裡の文化5年(1808)紀年名のものが最古とされており(関野:1936)、S B 109門跡の年代は19世紀代と考えることができよう。

### D. 竪穴状遺構

【S X 103 竪穴状遺構】S B 07 掘立柱建物跡の北側に位置し、地山面で検出された。S D 102 溝跡・S K 104 土壌に切られ、S B 07 掘立柱建物跡・S X 104 竪穴状遺構を切っている。隅丸長形状を呈すると思われる、長軸は約9 m・短軸は残存部で約6 m・深さは20 c mほどである。堆積層は5層(4a~7層)が確認され、人為層の可能性が高いように思われる。層中から陶磁器類・焼塩壺・硯・銭貨が出土している(第12図~14図)。

### 出土遺物(第13・14図)

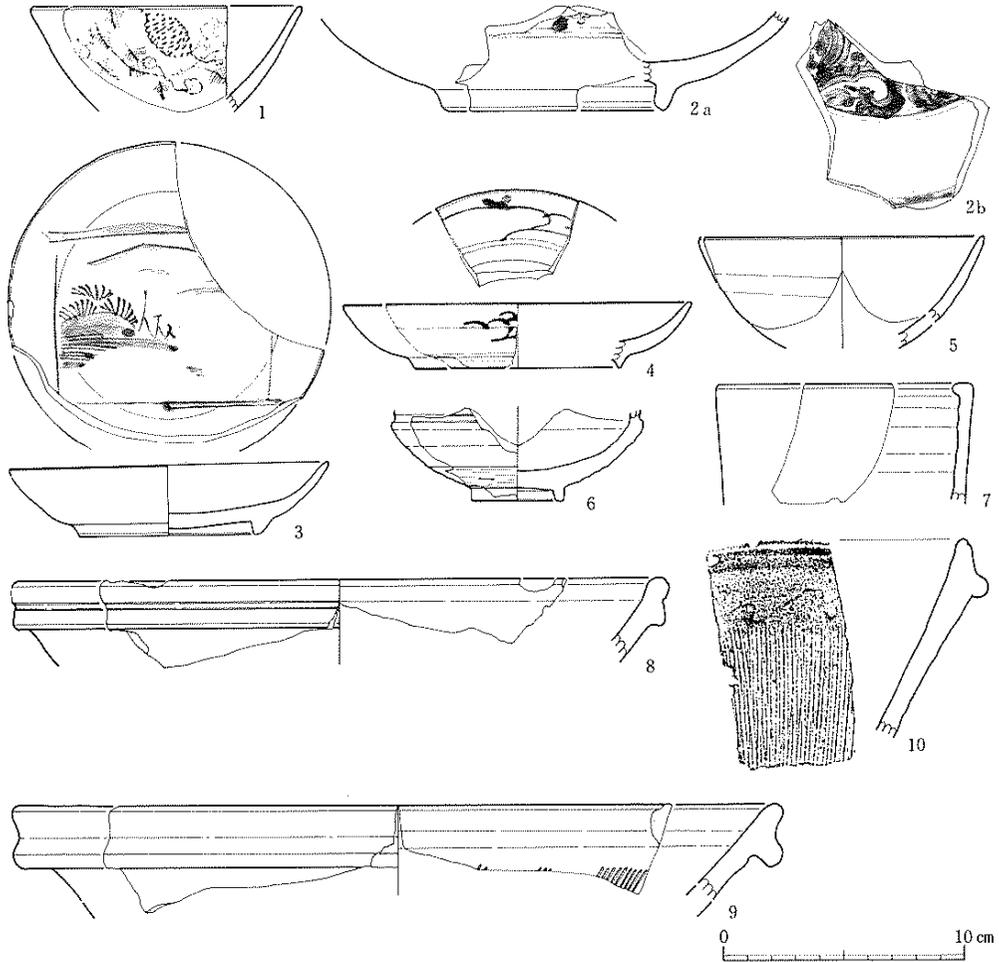
#### a. 染付磁器(第13図1~4)

1は飯碗で型押し文様である。2~4は肥前産と思われる、2は厚手の鉢で見込

に龍文が描かれている。3・4は小皿で4の見込には蛇ノ目釉ハギが見られる。2は18世紀代、3・4は18世紀中頃～19世紀初頭、1は19世紀後半の製品と思われる。

b. 施釉陶器 (第13図5～10)

5・6は飯碗、7は灰吹きで、7の口唇部には叩打による摩滅痕が見られる。8～10は摺鉢で、内外面に鉄釉が施されている。5～7は大堀相馬産の18世紀後半～19世紀の製品と思われるが、8～10については産地・年代とも不明である。



No	層位	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特 徴	産 地	図版No
1	2	磁器飯碗	11.3		(4.4)	染付。外側面に松梅型押し文。		11-16
2	堆積土	磁器中鉢		9.4	(4.3)	染付。見込に龍文。内・外側面の文様は不明。厚手。	肥前	11-17
3	堆積土	磁器皿	13.4	7.3	2.9	染付。見込に山水文。	肥前	11-18
4	堆積土	磁器皿	14.4	8.5	2.7	染付。内外側面に唐草文と團扇。見込に蛇ノ目釉ハギ。	肥前	11-19
5	5	陶器飯碗	11.8		(4.6)	色調：灰白色7.5Y8/2。外面口縁の一部に銅緑釉。細かな貫入あり。	大堀相馬	11-21
6	確認面	陶器飯碗		3.8	(3.8)	外面は腰部まで施釉。色調：淡黄色2.5Y8/3で細かな貫入あり。	大堀相馬	
7	堆積土	陶器灰吹き	10.6		(4.9)	内面は体中位まで施釉。色調：#1-7灰色10Y5/2で細かな貫入あり。口唇部に叩打痕。	大堀相馬	11-20
8	堆積土	陶器摺鉢	27.3		(3.4)	鉄釉（色調：赤褐色10R4/3）。焼成良好。		11-22
9	堆積土	陶器摺鉢	32.0		(4.5)	鉄釉（色調：暗赤褐色5YR5/6）。7条単位の筋目。焼成良好。		11-23
10	2	陶器摺鉢				鉄釉（色調：暗赤褐色5YR3/6）。5条単位の筋目。焼成良好。光沢がある。		

第13図 S X103出土遺物 (1)

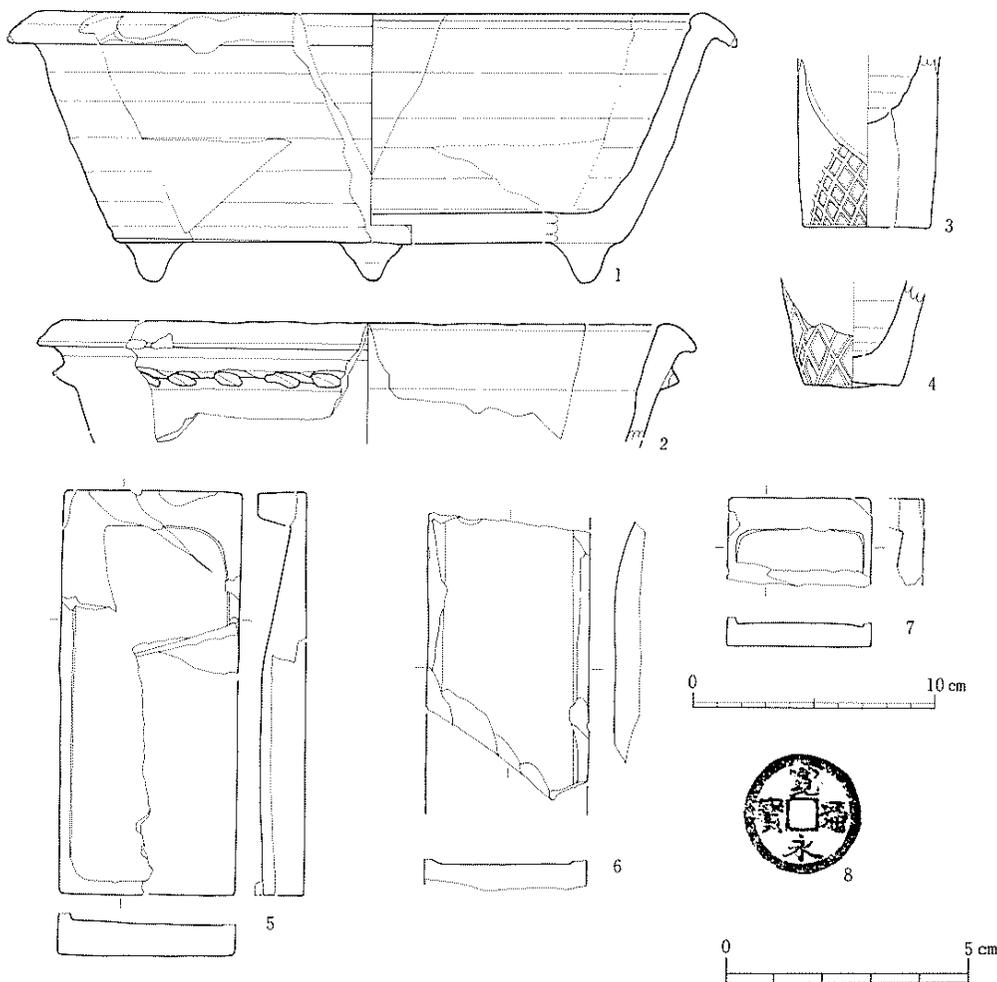
c. 瓦質土器 (第14図1・2)

鉢形のもので、1は円錐形の脚が付き、2は口縁部下に粘土紐による突帯が施されている。

産地・年代とも不明である。

d. 焼塩壺 (第14図3・4)

身の部分である。口口成形で底部には回転系切り痕が見られる。体部下に斜格子状のタタキ目が施されるのが特徴である。3は筒形で底が厚く、4は体部が僅かに開き気味に



No	層位	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特 徴	図録No
1	6	火鉢	(30.2)	21.0	10.9	瓦質土器。色調は外面が灰褐色7.5YR4/2、内面はこぶれ相5YR6/3。円錐形の脚が付き。焼成は良好。	11-24
2	6	鉢	27.2		(4.9)	瓦質土器。色調は内外面ともに黒褐色7.5YR3/1。頸部に横溝様の突帯。口唇部の厚減がやや良。	11-25
3	6	焼塩壺		5.2	(7.0)	底厚：4.3cm。外面に斜格子タタキ目。内面は火熱による赤変(赤褐色10R6/6)著しい。底部に回転系切り痕	12-1
4	堆積土	焼塩壺		4.0	(4.5)	底厚：1.2cm。外面に斜格子タタキ目。内面は火熱による赤変(赤褐色10R6/6)著しい。底部に回転系切り痕	12-2
5	2	碗	長さ16.3・幅7.3・厚さ(1.6)			素材は粘板岩。色調は灰オリーブ5Y6/2。長方観で縁立てはくり掘り。	12-3
6	5	碗	長(11.0)・幅6.7・厚さ(1.3)			素材は粘板岩(凝勝石)。色調は暗緑灰色10G4/1。長方観で縁立てはくり掘り。地元産。	12-4
7	6	碗	長(3.5)・幅5.9・厚さ(1.2)			素材は粘板岩(凝勝石)。色調は暗緑灰色7.5G4/1。長方観で縁立てはくり掘り。地元産。	12-5
8	堆積土	銭貨				古寛永通宝。明暦2年(1656)以前の鋳造。初鑄年寛永3年(1626)。	12-6

第14図 S X 103出土遺物 (2)

立ち上がり、底が薄い。産地・年代については後述する。

e. 硯 (第14図5~7)

いずれも粘板岩製の長方硯で、硯側は垂直で縁立てはくり掘りされている。5・6では胸が見られず、緩やかに落潮が形成され、海の部分の隅が丸くなっている。6・7は雄勝石と

考えられ、地元産と思われる。

f. 銭貨 (第14図8)

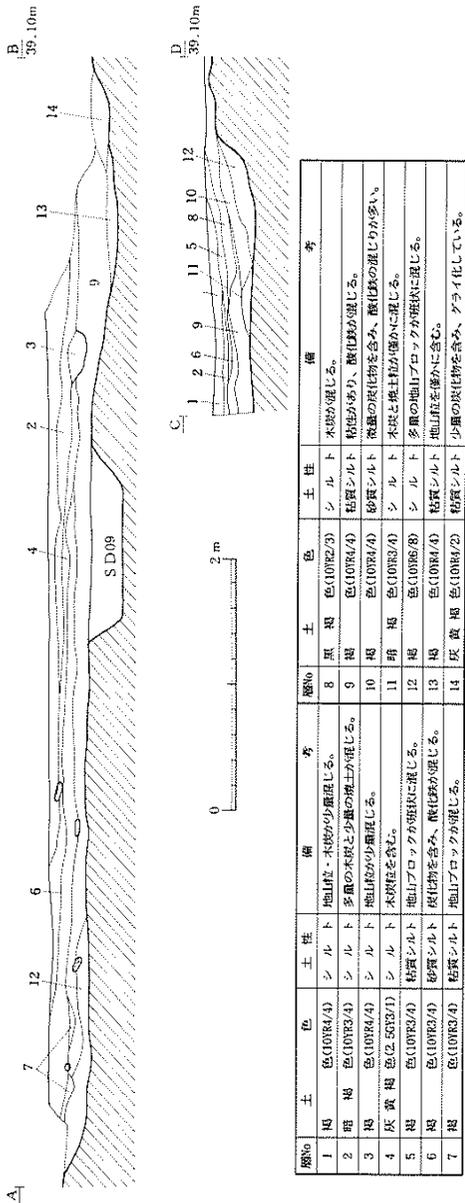
古寛永通宝で明暦2年以前に鑄造されたものである。産地は不明である。

【S X 104 竪穴状遺構】 S X 103 竪穴状遺構の東側に位置し、地山面で検出された。S D 102 溝跡・S X 103 竪穴状遺構土壌に切れ、S B 07 掘立柱建物跡・S X 09 溝跡を切っている。長軸10m以上・短軸約9mの不整楕円形状を呈すると思われる。深さは概ね30cmほどで、底面はほぼ平坦であるが、北東部分のみ60cmほどに深くなっている。堆積層は14層が確認され、2層を主に上下の層から磁器・陶器・土師器質土器・焼塩壺・瓦類・煙管・銭貨など多量の遺物が出土している(第15図~18図)。

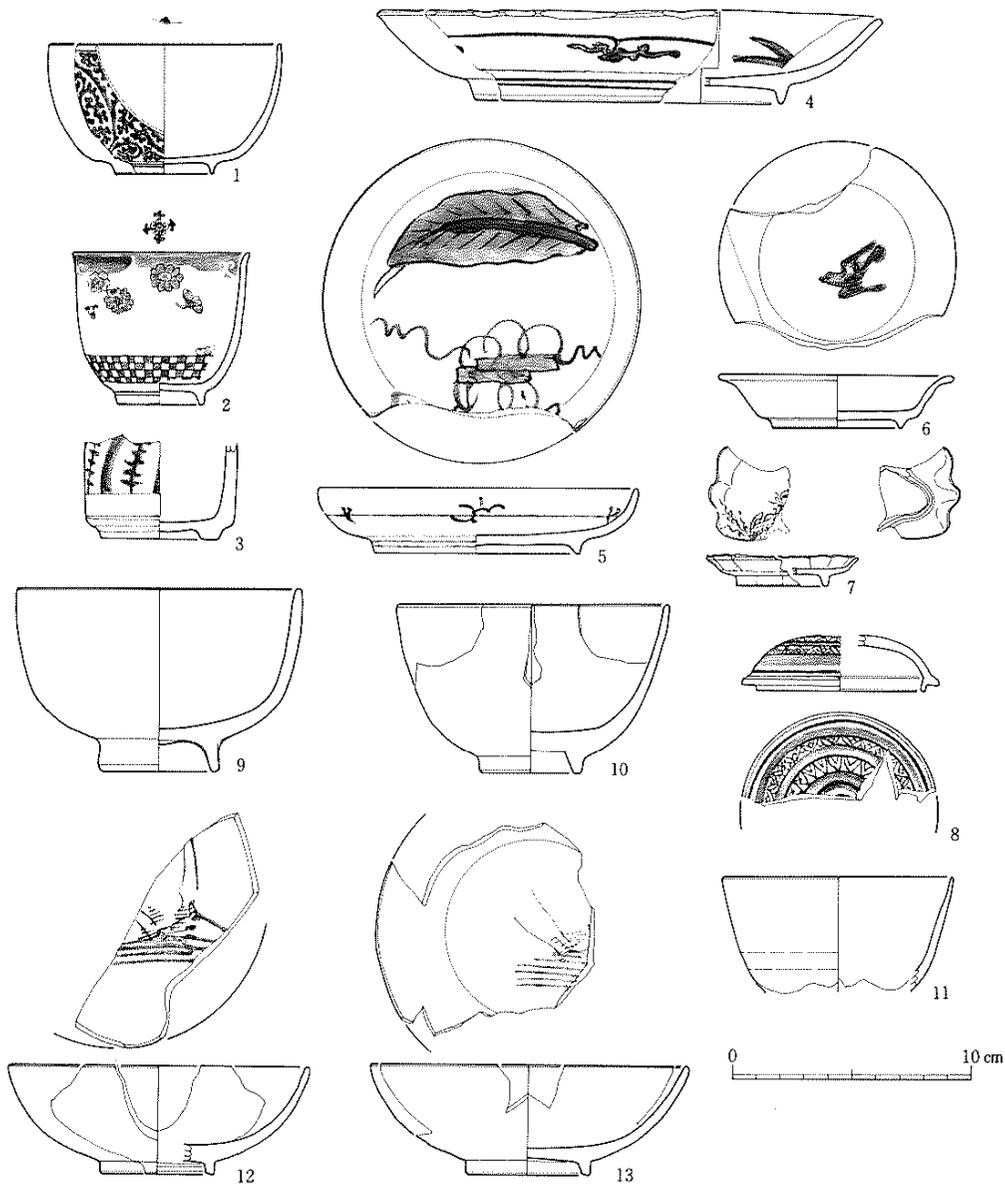
出土遺物 (第16図~18図)

a. 磁器 (第16図1~8)

1~7は染付、8は色絵である。1は腰部の丸み強い薄手の飯碗で、外面には均整のとれた蛸唐草文、見込には手描五弁花文、高台内には軍配とヒョウタンの成物文が配されている。2・3は湯呑碗である。2は端反で外面口縁部に墨弾き手法による雲文が描かれている。3は筒型で2に比して高台・器壁とも厚手に作られている。4~7は皿である。4は輪花皿で見込に楓文が、5は丸皿で外面に唐草文、見込に一葉と宝文が、6は端反皿で見込に鳥文が、7は型打ち成形した糸切り



第15図 S X 104断面図



No	層位	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特 徴	産 地	図版No
1	1	磁器 飯碗	9.6	4.0	5.4	染付。外側面に刺唐草文。見込に手描五弁花文、高台内に成物文。	肥 前	12-7
2	8	磁器 湯呑碗	7.4	3.4	6.3	染付。外面口縁部に雲文(墨押き)、体部に花文、腰部に千鳥格字文。見込に手描五弁花文。	肥 前	12-8
3	6	磁器 湯呑碗		4.9	(4.0)	染付。外側面に縹文、腹部と高台に圈線。	肥 前	12-9
4	4	磁器 輪花皿	21.0	13.0	3.7	染付。外側面に唐草文と圈線。内側面に縹文?	肥 前	12-11
5	6	磁 器 皿	13.3	8.6	2.7	染付。外側面に唐草文と圈線。見込に一葉と宝文。高台内に1条の圈線。	肥 前	12-13
6	6	磁器 皿	9.8	5.4	2.2	染付。見込に鳥文。	肥 前	12-10
7	6	磁器 小皿			1.3	染付。変形輪花型打ち手浅皿。見込に蔓草文。	肥 前	12-12
8	1+3	磁器 段重蓋	9.2	8.0	(2.3)	赤絵文様とグラデーション帯。	肥 前	12-16
9	2	陶器 飯碗	11.8	4.5	7.6	墨付けを除く全体に淡黄色2.5Y7/3 の釉がかかる。貫入が著しい。	美 濃	12-14
10	2	陶器 飯碗	11.3	4.1	7.0	内外面とも灰オリーブ7.5Y6/2 に灰白色5Y8/2 の線巻き文様。墨付けから高台内に砂粒付着。	美 濃	13-1
11	堆積層	陶器 飯碗	9.6		(4.8)	灰黄色2.5Y7/2 の灰釉が全体にかかる。器壁は薄手である。		12-15
12	6	陶器 深皿	12.6	4.8	4.5	京焼風陶器。色調は淡黄色2.5Y8/3 で細かな貫入がある。見込に鉄絵山水文。	肥 前	13-2
13	6	陶器 深皿	13.4	5.2	4.5	京焼風陶器。色調は淡黄色2.5Y7/3 で細かな貫入がある。見込に鉄絵山水文。高台に押印。	肥 前	13-3・8

第16図 S X104出土遺物(1)

細工の変形輪花手塩皿で見込に蔓草文が描かれている。8は段重の蓋で文様は赤絵で描かれている。

以上の磁器類は6を除いて18世紀前半頃の肥前産と思われる。6については産地・年代ともに不明である。

#### b. 陶器 (第16図9～第17図4)

9～11は飯碗である。9は高台が高く、底部から腰部にかけて丸みが強い。口縁部は直立気味になっている。畳付けを除いて灰釉が掛けられ、貫入が著しい。10は9に比して口縁部が開いている。畳付けを除いて内外面ともに銅緑釉と白釉が蛇の目状に掛け分けられており、貫入がある。11は灰釉が掛かる薄手の小型品で貫入は見られない。

12・13、第17図1・2は深皿である。底部から腰部にかけて丸みが強く、高台部分は断面角形に削られ、高台内は平滑に仕上げられている。精錬された緻密な胎土で作られ、高台部を除いて淡黄色の釉が掛かる。見込には錆絵で山水文が描かれ、高台内の中央には浅い円刻と押印が見られる(写真図判13-8～10)。

第17図3は角腰の皿、4は脚付きの火入れである。3は高台部分を除いて灰釉が掛けられ、見込に重ね焼きの痕跡が残っている。4は底部に回転系切り痕が見られ、底部・内面体した部を除いて黒と褐色の釉が縞模様で掛けられている。

以上の陶器類は9・10・5が17世紀前半の美濃産、12・13・1・2が17世紀後半の肥前産と思われる。4・11の年代・産地は不明である。

#### c. 土師質土器 (第17図5～11)

カワラケと称される皿類で、底部に回転系切り痕を残している。口径12～13cmのものが多く、7のみが約半分の大きさである。5・7・8では口縁部を主に煤や不純物の付着が見られ、灯明皿としての使用が考えられる。

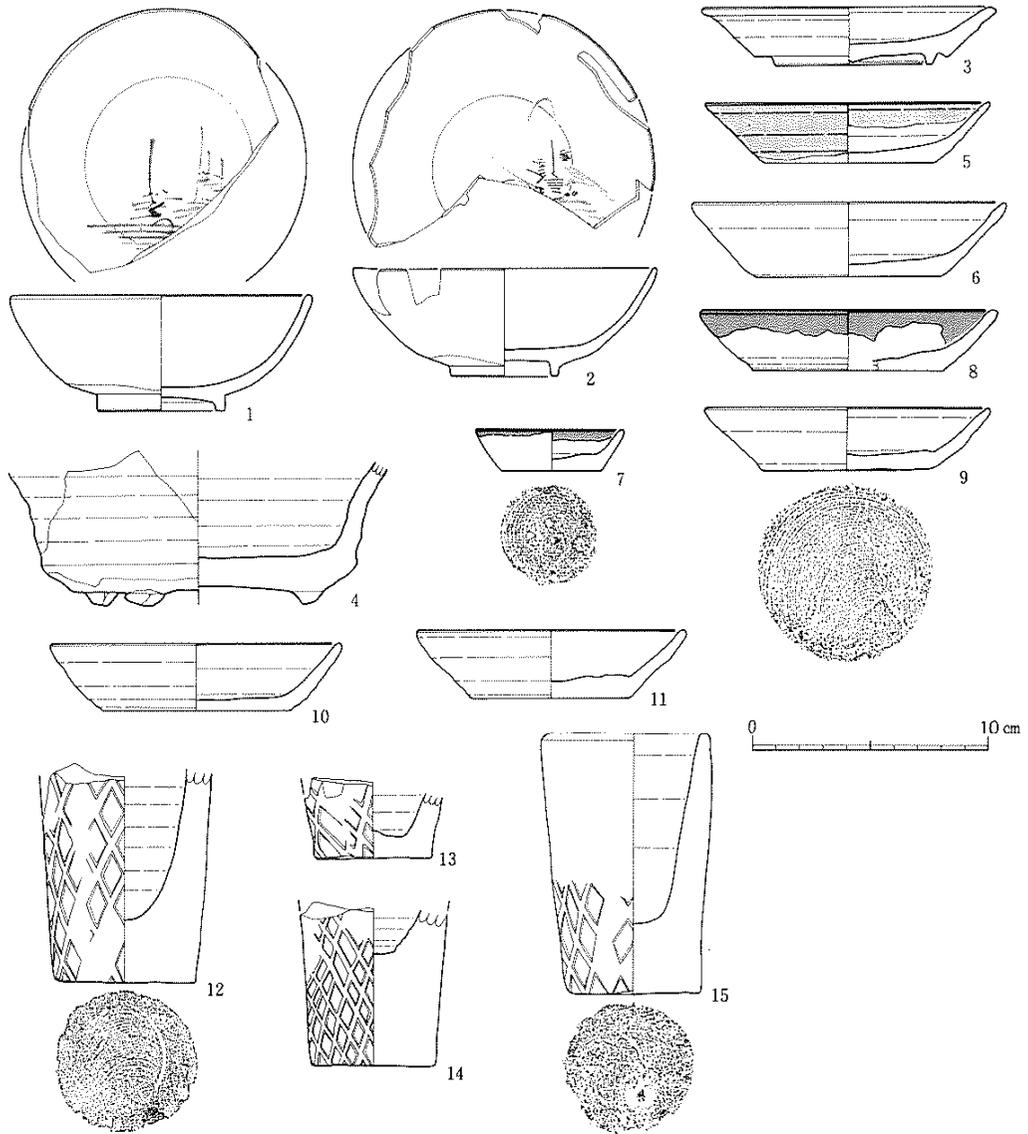
#### d. 焼塩壺 (第17図12～15)

身の部分である。底部に回転系切り痕を残し、体部には斜格子状タタキ目が施される。15は完形品でコップ形を呈している。底は13のように1cm前後の薄いものから14のように4.5cmと厚いものまで様々であり、斜格子状タタキ目についても大小が見られる。

#### e. 瓦類 (第18図1～4)

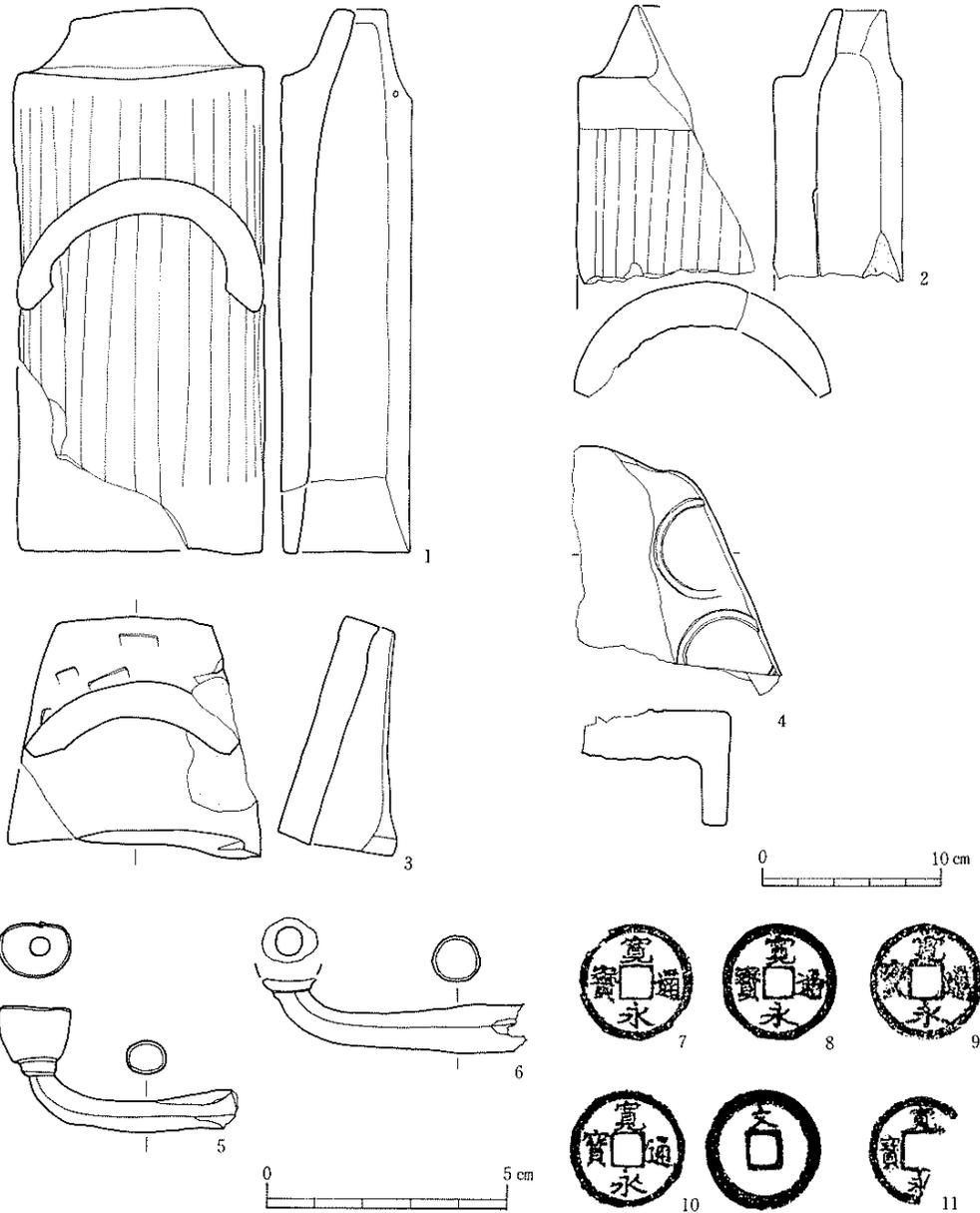
1・2は玉縁の付く有段丸瓦である。長さ29cm前後・幅14cm前後で、玉縁部の長さは3～4cmである。凸面体部に縦方向のナデ調整が施され、凹面には系切り痕・布目・刺突痕が見られる。2では体部と玉縁部との境の段の部分に「田」印の刻印が見られる(写真図版15-2)。

3・4は道具瓦で、3は棟込め瓦、4は鬼瓦である。3は丸瓦を横に半割し、側辺を切



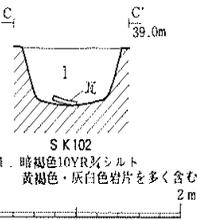
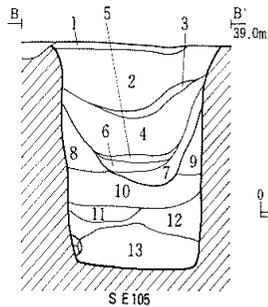
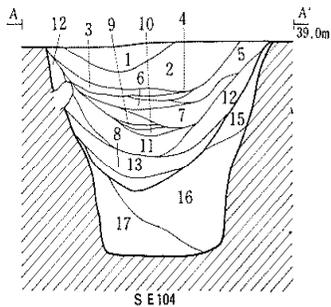
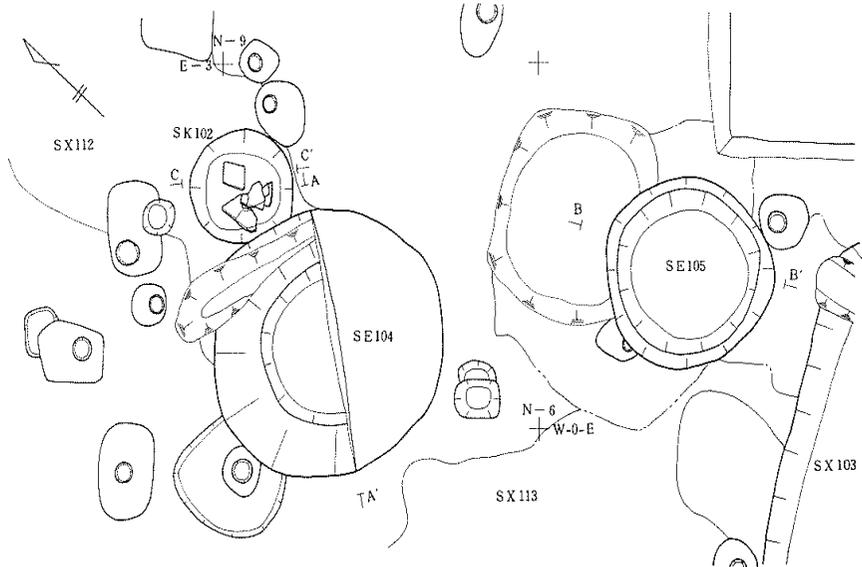
No	層位	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特 徴	産 地	図録No
1	2	陶器 深皿	12.7	5.4	4.8	京焼燗陶器。色調は淡黄色2.5Y8/3 で細かな貫入がある。見込に鉄絵山水文。高台に押印。	肥 前	13-4・9
2	2	陶器 深皿	12.8	4.5	4.5	京焼燗陶器。色調は淡黄色10Y8/4 で細かな貫入がある。見込に鉄絵山水文。高台に押印。	肥 前	13-5・10
3	2	磁 器 皿	12.4	6.6	2.3	長石釉。色調は外面がにすい黄橙10Y8/3 で内面は暗灰黄色2.5Y5/2。重ね焼きの痕跡あり	美 濃	13-6
4	1	陶器 火入れ		10.6	(5.7)	四脚付き。体部は内外とも黒と褐色の縞模様で体下部はにすい黄色2.5Y6/3。底部・脚露胎		13-7
5	8	灯 明 皿	12.0	7.2	2.5	土師質土器（カワラケ）。底部に回転糸切り痕。内外面とも煤付着。		14-1
6	6	灯 明 皿	13.2	7.8	3.1	土師質土器（カワラケ）。底部に回転糸切り痕。		14-4
7	2	灯 明 皿	6.2	4.2	1.7	土師質土器（カワラケ）。底部に回転糸切り痕。小型品で内外口縁部に煤・不純物付着。		14-3
8	2	灯 明 皿	12.5	8.0	2.5	土師質土器（カワラケ）。底部に回転糸切り痕。内外面とも煤・不純物付着。		14-2
9	1	灯 明 皿	12.0	7.0	2.5	土師質土器（カワラケ）。底部に回転糸切り痕。		
10	堆積層	灯 明 皿	12.2	7.9	2.8	土師質土器（カワラケ）。底部に回転糸切り痕。		
11	堆積層	灯 明 皿	11.3	6.6	2.8	土師質土器（カワラケ）。底部に回転糸切り痕。		
12	6	焼 塩 壺		6.0	(8.6)	底厚：2.5cm。ロクロ成形で外面に斜格子タタキ目。底部に回転糸切り痕。		14-6
13	2	焼 塩 壺		5.0	(3.3)	底厚：0.9～1.2cm。ロクロ成形で外面に斜格子タタキ目。底部に回転糸切り痕。		14-8
14	1	焼 塩 壺		5.2	(6.4)	底厚：4.5cm。ロクロ成形で外面に細かい斜格子タタキ目。底部に回転糸切り痕。		14-7
15	堆積層	焼 塩 壺	7.1	5.5	10.7	完形品。底厚：2.9cm。ロクロ成形で外面に斜格子タタキ目。底部に回転糸切り痕。		14-5

第17図 S X104出土遺物（2）



No	層位	器種	特 徴	図録No
1	4	丸瓦	全長29.2cm、最大幅13.5cm、厚さ1.5～2.0cm、玉縁長3.0cm。凸面にナデ、凹面に布目・刺突痕。	15-1
2	確認面	丸瓦	残存長15.1cm、厚さ1.8～2.5cm、玉縁長4.0cm。凸面にナデ、凹面に布目・刺突痕。凸面体部と玉縁部の境に「田」印の刻印。	15-2
3	4	棟込め瓦	全長12.5cm、広端幅14.6cm、狭端幅8.5cm、厚さ2.0cm、凸面にヘラの痕跡、凹面に布目痕。	15-3
4	4	鬼瓦	瓦当の厚さ2.7cm、縁部の厚さ1.5cm。外面の周縁部に円文。内面はカキトリ・ケズリの痕跡。	15-5
5	確認面	埴管	銅製の雁首。残存長5cm。河骨形で補強帯あり。火皿は楕円形で長軸1.5・短軸1.1cm、深さ1.4cm、孔径5mm、首部は径8mm。	14-9
6	2	煙管	銅製の雁首。残存長5.5cm。河骨形で補強帯なし。火皿欠損。首部径は火皿側が5.5mm・羅字側が4.0cm。	14-10
7	5	銭貨	古寛永通宝。明暦2年(1656)以前の铸造。初铸年は寛永3年(1626)。	14-11
8	5	銭貨	古寛永通宝。明暦2年(1656)以前の铸造。初铸年は寛永3年(1626)。	14-12
9	2	銭貨	古寛永通宝。明暦2年(1656)以前の铸造。初铸年は寛永3年(1626)。	14-13
10	2	銭貨	新寛永通宝。寛文8年(1668)以降に铸造。背郭部に「文」字を配している。	14-14
11	2	銭貨	新寛永通宝。寛文8年(1668)以降に铸造。	14-14

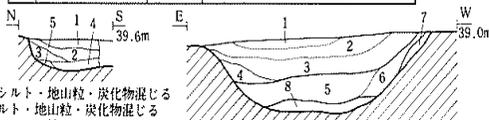
第18図 S X 104出土遺物(3)



SK102  
1. 暗褐色10YR3/4シルト  
黄褐色・灰白色岩片を多く含む  
0 2m

層No	土色	土性	備考
1	暗褐色(10YR3/4)	シルト	地山ブロックと小礫を僅かに含む。
2	暗褐色(10YR3/3)	シルト	1層に比して地山ブロックを多く含む。
3	暗褐色(10YR3/2)	粘質シルト	炭化物を僅かに含む。
4	褐色(10YR4/4)	砂質シルト	
5	暗褐色(10YR3/4)	シルト	微量の地山ブロックと炭化物を含む。
6	黒色(10YR2/1)	砂質シルト	5層に比して多めの炭化物を含む。
7	褐色(10YR4/4)	シルト	微量の地山ブロックと炭化物を含む。
8	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	多量の地山ブロックと少量の小礫を含む。
9	褐色(7.5YR4/3)	砂	
10	灰褐色(10YR4/1)	砂質シルト	
11	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	地山ブロックを僅かに含み、小礫の混じりが多い。
12	明黄褐色(10YR7/6)	砂質シルト	多量の地山ブロックを含む。
13	灰黄褐色(10YR4/2)	粘土	グライ化している。
14	灰黄褐色(10YR4/2)	粘土	グライ化した15・16層の砂質シルトが混じる。
15	明黄褐色(10YR7/6)	砂質シルト	12層に比して多量の炭化物の混じりが多い。
16	明黄褐色(10YR7/6)	砂質シルト	多量の地山ブロックと小礫を含む。
17	黄褐色(10YR7/8)	砂質シルト	多量の地山ブロックと小礫を含む。

層No	土色	土性	備考
1	褐色(10YR4/4)	シルト	地山小ブロック・小礫が多く混じる。
2	暗褐色(10YR3/4)	シルト	地山小ブロックと炭化物を少量含む。
3	暗褐色(10YR3/4)	シルト	木炭主体の層で地山小ブロックを少量含む。
4	暗褐色(10YR3/3)	シルト	2層とはほぼ同様である。
5	黒色(10YR2/1)	シルト	3層とはほぼ同様である。
6	褐色(10YR4/4)	粘土	地山ブロック。
7	暗褐色(10YR3/4)	砂質シルト	大きめの地山ブロックを少量含む。
8	暗褐色(10YR3/3)	シルト	地山小ブロックを少量含む。
9	褐色(10YR4/4)	砂質シルト	地山小ブロックを少量含む。
10	黒色(10YR2/1)	シルト	地山小ブロック・地山粒・炭化物を少量含む。
11	暗褐色(10YR2/3)	シルト	炭化物・地山粒を少量含む。
12	暗褐色(10YR3/4)	シルト	地山ブロックを少量含む。
13	黄灰色(2.5Y4/1)	粘質シルト	20cm大の礫が混じる。



1. 暗褐色シルト・地山粒・炭化物混じる
2. 褐色シルト・地山粒・炭化物混じる
3. 黄褐色シルト・地山ブロック・礫混じる
4. 暗褐色シルト・地山ブロック・礫混じる
5. 褐色シルト・地山ブロック混じる

層No	土色	土性	備考
1	暗褐色(10YR2/3)	シルト	地山ブロック・炭化物を僅かに含む。しまりあり。
2	暗褐色(10YR2/3)	シルト	多量の地山ブロックと少量の炭化物を含む。しまりあり。
3	暗褐色(10YR3/3)	シルト	地山ブロックと炭化物・機土を僅かに含む。しまりあり。
4	黒褐色(10YR3/2)	シルト	少量の地山ブロックと炭化物を含む。しまりあり。
5	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山の大ブロックを多量に含む。しまりあり。
6	黒褐色(10YR3/2)	粘土質シルト	地山の小ブロックを僅かに含む。しまりあり。
7	にぶい黄褐色(10YR5/6)	粘土	地山に黒褐色土の混じりあり。
8	にぶい黄褐色(10YR6/4)	粘土	小礫混じる。底面はグライ化。

第19図 SE101.102, S K102, S K103, S D09

りとして平面を台形にしたもので、凹面の各辺は面取りされている。4は降り棟等に用いられる比較的小型の鬼瓦の断片と思われる。円文が施されている。

以上の瓦類のうち、丸瓦の特徴は近世瓦の生産地である利府町大沢窯跡出土の17世紀中葉頃と考えられている丸瓦の特徴に類似しているが(藤沼ほか：1987)、軒瓦とのセット関係が不明であることから特定の年代を与えることはできない。

#### f. 煙管 (第18図5・6)

銅製で「河骨形」の雁首である。5は火皿が楕円形で補強帯があり、6は補強帯がなく、首部は羅宇側が太くなっている。5は17世紀後半、6は18世紀前半のものとされている(小泉：1983)。

#### g. 銭貨 (第18図7～11)

いずれも寛永通宝で7～9は古寛永、10・11は新寛永と称されるものである。10は背郭部に「文」字を配した俗称「文銭」である。古寛永は明暦2年(1656)以前に、新寛永は寛文8年(1668)以降に鑄造されたものである。生産地は明らかではない。

### E. 井戸跡

【S E104井戸跡】S X103竪穴状遺構の西約5mに位置し、S A105柱穴列・S K102土壌・S X112整地地業を切っている。円形の素掘りの井戸で、壁は下方が垂直で中位から上は開いている。上端径約2.2m・下端径約1.1m・深さ1.8mで、堆積土は17層に細分される。上位の1～14層はレンズ状の堆積をしている(第19図)。

【S E105井戸跡】S E104井戸跡の東約2mに位置し、地山面で検出された。円形の素掘りの井戸で、壁は垂直に立ち上がる。上端径約1.6m・下端径約1.1m・深さ1.8mで、堆積土は13層に細分され、上位の1～7層はレンズ状の堆積をしている(第19図)。

### F. 土壌

【S K102土壌】S X112整地地業に覆われ、S E104井戸跡に切られている。径90cmの円形で壁はほぼ垂直に立ち上がり、深さは50cmほどである。堆積土は地山粒・凝灰岩小ブロックを多く含む暗褐色シルトで、堆積土の下位および底面直上から平瓦片が多く出土している(第19図)。

【S K103土壌】調査区東南端の地山面で検出された。重複や攪乱で壊されているため一部しか残っていない。平面形は径80cmほどの円形基調と思われ、深さは残存部で20cmほどである。堆積土には焼土・炭化物が含まれ、ロク口使用の土師器坏片が出土している。

【S K104土壌】S X103竪穴状遺構の堆積土上面で検出された。径1.5mほどの不整形円形で深さは20cmほどである。底面は皿状を呈し、壁の立ち上がりは緩い。堆積土は暗褐色シルトで、型押し文様の染付磁器飯碗・硯が出土している(第12図・13図1・14図5)。

【S K105土壌】S R01炭窯跡煙道と接しているが新旧関係は不明である。一部しか残存していない。残存部での平面形は円形基調で、径1.2mほどの大きさがあり、深さは25cmほどである。底面は平坦で、壁は比較的急に立ち上がる。堆積土は暗褐色・褐色シルトで、下位の層は埋められている(第19図)。

### G．溝跡

【S D102溝跡】S X103竪穴状遺構の堆積土を切り、南西から東方向に屈折しながら走っている。幅は30cmほどで深さは3～10cmである。堆積土は東側では暗褐色シルト、南西では凝灰岩粒が多量に混じった暗褐色土である(第9図)。

【S D09溝跡】第3次調査で検出されていた南北方向に走る古代の溝の北側延長部分にあたる。地山面で検出され、S X104竪穴状遺構に切られている。規模は上幅が最大で2.4m、下幅は0.9m、深さは最大で74cmを測る。底面は平坦で、壁の立ち上がりは緩やかである。堆積土は6層が認められ、須恵器甕の破片が出土している(第9・19図)。

出土遺物(第20図1)

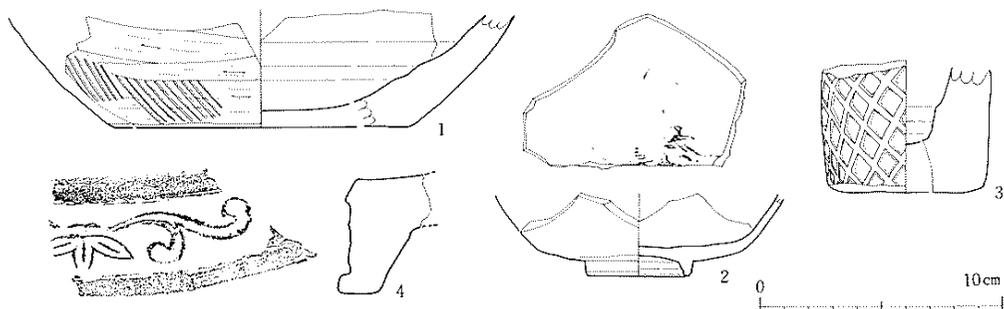
体部下～底部の資料である。器面調整として平行タタキ目の後ケズリ調整が施されている。古代のものであるが時期は特定できない。

### H．炭窯跡

【S R01炭窯跡】第3次調査で炭化室、前庭部が検出されていたもので、今回の調査で煙道部が明らかになった。S K105土壌と接するが新旧関係は不明である。煙道部は長さ約60cm・幅20～45cmで、先端部に向かって約13°の角度で上っている。煙道入り口は河原石の袖石の上に板石を乗せて構築されており、幅20cm・高さ9cmの開口部を設けている。

### I．整地地業

【S X112整地地業】S B108掘立柱建物跡周辺からS K102土壌周辺まで認められる凝灰岩



No	出土地区・層位	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特 徴	産 地	図版No
1	S009 堆積土	須恵器甕		12.0	(4.7)	外面に平行タタキとヘラケズリ。内面はロクロ調整。		
2	SX113 整地層	陶器深皿		4.4	(3.5)	京焼燻陶器。浅黄色10YR6/4 で細かな貫入あり。見込に焼繪山水文。高台に「柴」の押印。	肥 前	14-16
3	SX113 整地層	埴 塼 甕		6.5	(5.6)	底厚:2.1cm。外面に斜格子タタキ目。内面は火熱により赤変。底部に回転糸切り痕あり。		14-17
4	SX113 整地層	#F 平瓦				中央に雲母ちり紙文を配し、その両側に唐草文を対称に配する。	地 元	15-6

第20図 S D09出土遺物他

小ブロック・地山ブロックを主体とする整地層である。部分的な確認ではあるが8cmほどの厚さがある。SB108に切れ、SK102を覆っている。館に伴う建物跡の構築に係る整地の可能性がある(第9図)。

【SX113整地地業】SA105・106柱穴列の東南側に認められる地山ブロックを主体とした整地層である。層中から京焼風陶器・焼塩壺・瓦などが出土している。

出土遺物(第20図2~4)

2は施釉陶器の深皿で、高台部を除いて淡黄色の釉が掛かり、見込には錆絵で山水文が描かれている。高台は断面角形に削られ、高台内の中央部には浅い円刻と押印が見られる(写真図判14-15)。肥前産で17世紀後半の製品と思われる。3は斜格子状のタタキ目が施される焼塩壺の身で、底部には回転糸切り痕が見られる。4は軒平瓦で瓦当文様は雪持ち笹を中央に配し、その両脇に唐草文を対称に配するものである。雪笹文は5代当主茂庭姓元の妻である万松院生家藤波家の家文で元禄初年頃から茂庭家の家文として使用されたとされ(茂庭他：1980)、瓦の年代も元禄初年以降と考えられる。

### D - 3 区

この調査区は館の南東隅に近い部分にあたり、第3次調査C - 1区の東側に連続する地区である。旧校舎の基礎や焼却したゴミの捨て場などで攪乱されている所が多い。

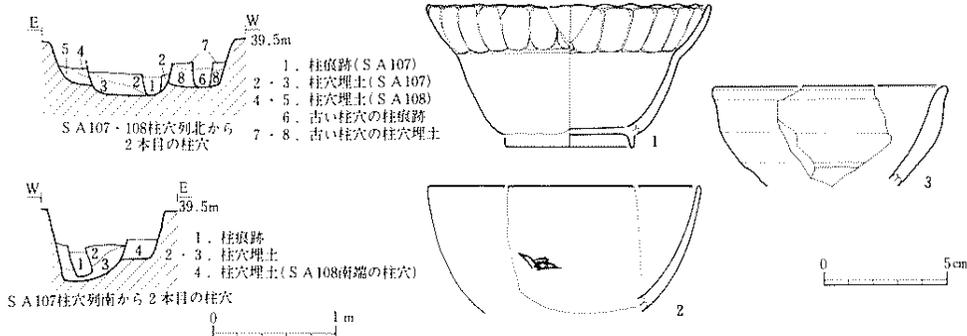
#### 発見された遺構と遺物

発見された遺構は柱穴列2列、井戸跡2基、溝跡1条、道路跡1条、整地地業などで(第9図)、井戸跡から磁器・瓦が出土している。なお、道路跡は館南脇の道路に相当する遺構でD - 4区まで連続して認められている。この遺構の記載は後述するD - 4区の項でまとめて行うことにする。

#### A . 柱穴列

【SA106柱穴列】SB05掘立柱建物跡の南側に位置し、地山面で検出された。南北方向に4個の柱穴が並ぶもので、SA107柱穴列に切られている。柱穴は長軸が1.1m・短軸が60cmほどの不整楕円形あるいは不整長方形で、深さは20~30cmである。埋土は褐色シルトで多量の地山ブロックと少量の炭化物が混じる。柱痕跡は検出されていない。柱穴の心々での距離は2.0~2.1mである(第21図)。

【SA107柱穴列】SB05掘立柱建物跡の南妻に接するように、南北方向に5個の柱穴が並ぶもので、地山面で検出された。SA106柱穴列とほぼ同じラインに並び、これを切っている。柱間隔は南から1.8・2.2・2.0・2.0mである。柱穴は長軸が50~60cmの楕円形を基調とし、深さは35~55cmである。埋土は褐色シルトで多量の地山ブロックと少量の炭化物



No	出土地区・層位	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特 徴	産 地	図版No
1	SE101 堆積土	白磁小鉢	11.6	(5.2)	(5.0)	型作り輪花小鉢。口紅あり。	肥 前	14-17
2	SE101 堆積土	染付磁器碗			(5.0)	貫入あり。外側面に染付千鳥文。	肥 前	14-18
3	SX114 整地上面	天目茶碗			(4.2)	鉄釉(色調:暗赤褐色10R3/2・赤褐色10R4/4)。外側下半は露胎。	瀬 戸	14-19・20

第21図 S A 107,108断面図とD-3区出土遺物

が混じる。柱痕跡は径が15cmほどの円形で、深さは35~55cmである(第21図)。

## B. 井戸跡

【SE101井戸跡】円形の素掘りの井戸で、地山面で検出された。壁はほぼ垂直に立ち上がっている。上端径約1.1m・下端径約70cm・深さ2.2mである。堆積土は暗褐色等のシルトで地山ブロック・礫の混入が見られた。崩落の危険があったので土層観察のベルトは途中までしか設定しなかった。堆積土中から磁器2点と平瓦片が出土している。

出土遺物(第22図1・2)

1は型造りの白磁輪花小鉢で、口紅が施されている。2は染付磁器飯碗で、千鳥文が描かれ、貫入が著しい。ともに肥前産で、1は17世紀末~18世紀初頭の製品と考えられるが、2については年代が不明である。

【SE102井戸跡】SE104井戸跡の東約1mに位置し、地山面で検出された。円形の素掘りの井戸で、壁は垂直に立ち上がる。上端径1mで、深さは約3.3mまで確認しているが、崩落の危険があったので以下の掘下げを止めている。堆積土はSE101とほぼ同様であるが、礫の混入量が多い。堆積土中から染付磁器片・平瓦片などが出土している。

## C. 溝跡

【SD103溝跡】SX114整地地業下位の地山面で検出され、東西方向に走っている。上幅は0.6~1.1mで東側が広く、下幅は25cmほどである。深さは30cmほどで西から東に傾斜している。堆積土は暗褐色シルトで多量の地山ブロックが混入している。

## D. 整地地業

【SX114整地地業】SE102井戸跡の東北側に見られる整地地業である。暗褐色土を主体とし、若干の地山ブロック・小礫が混じっている。東側に傾斜する地山上に20~50cmの厚

さで認められ、館跡東脇際の平坦面を造りだすための整地と考えられる。整地の上面から施釉陶器である天目茶碗の破片が出土している。

#### 出土遺物（第21図3）

天目茶碗である。同一個体と思われる破片が2点出土している。外面の体部上半と内面に鉄釉が掛けられ、暗赤褐色や赤褐色に発色している。体下部は露胎である。瀬戸産で17世紀前半頃の製品と思われる。

### D - 4 区

第3次調査C - 1区の南側に隣接する調査区で、館の南脇に相当する地区である。第3次調査以後の新校舎建築に伴う基礎掘削によって北側部分は大きく削平され、遺構は壊されていた。また、西側部分では中学校造成の際に1m以上の盛土が行われていた。

#### 発見された遺構と遺物

発見された遺構は柱穴列1列、打ち込み杭列1列、井戸跡1基、溝跡1条、土塁1条、道路跡1条、整地地業などである(第22図)。発見された遺物は陶磁器類・瓦・石臼などで、主に道路跡南側の側溝から出土している。

#### A. 柱穴列

【S A108柱穴列】4個の柱穴が東西に1間、南北に2間のL字状に認められるもので、S X 04道路跡から北側に約50cm離れた地山面で検出された。柱間隔は東西が1.85m・南北が1.8m等間である。柱穴は径が25～35cmの円形を基調とし、埋土は暗褐色シルトに地山ブロックが混じる。柱痕跡は径が10～15cmの円形で、深さは20cmほどである。

#### B. 打ち込み杭列

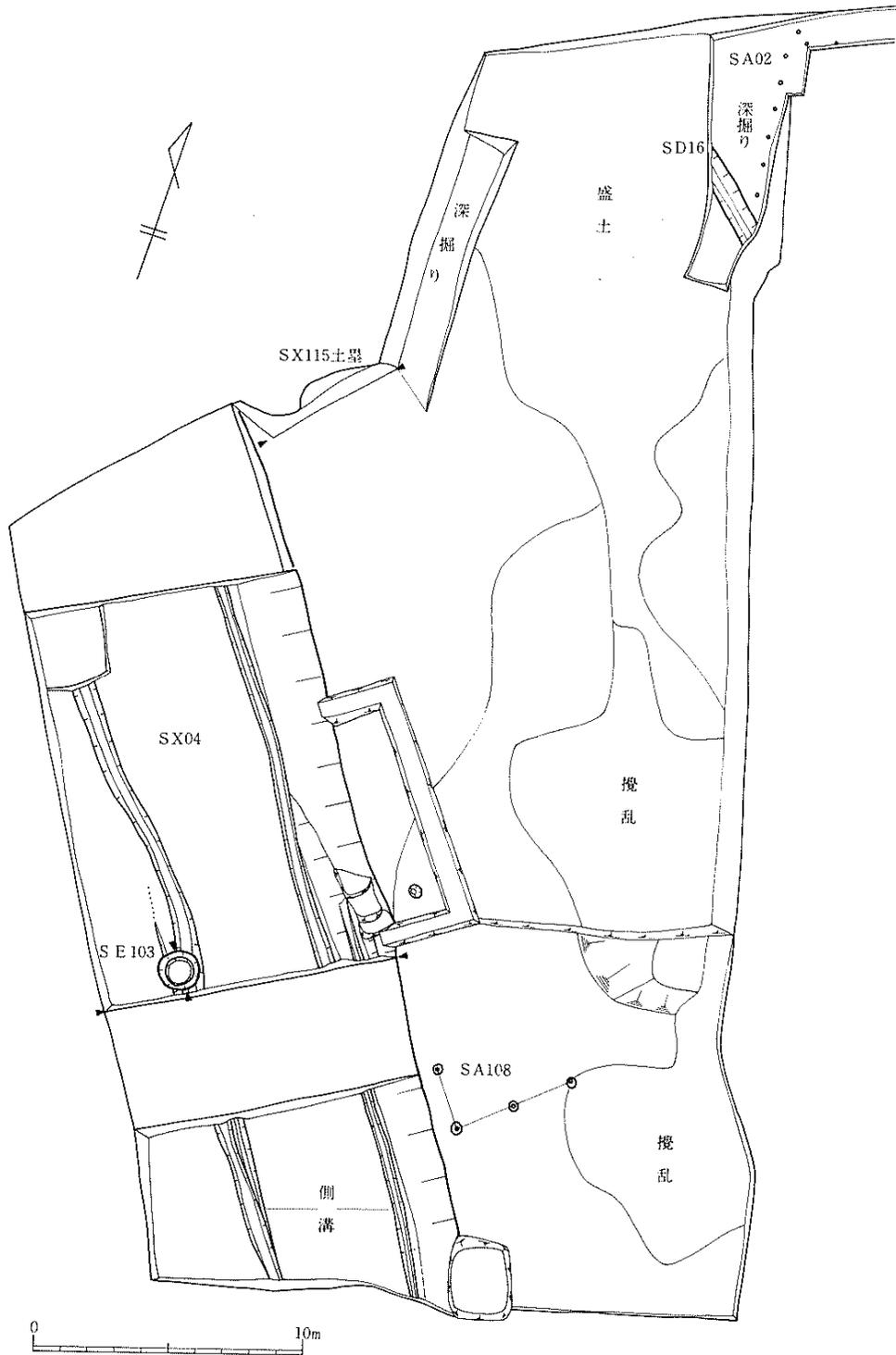
【S A02打ち込み杭列】第3次調査で検出された打ち込み杭列の南辺に相当するもので、盛土下の整地面(S X116)で検出された。全体としては東西12m・南北6.6mの長方形の配置を示し、北から1.8mのところ仕切りが見られる。杭は径15cmほどの皮付きの丸太材で、0.7～1.1mの間隔で打ち込まれている。塀跡と考えられる。

#### C. 井戸跡

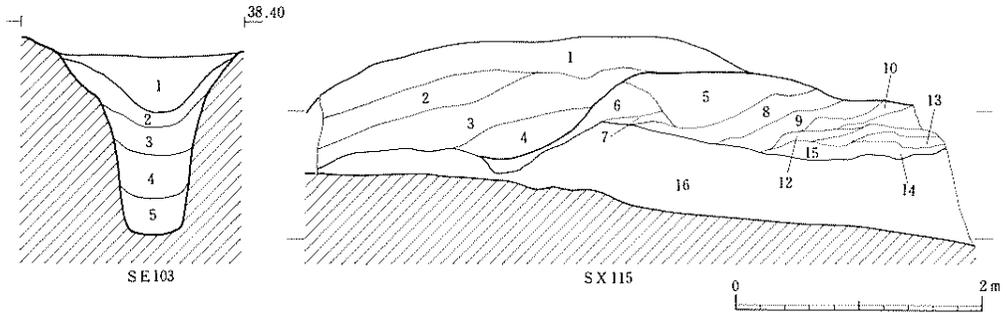
【S E103井戸跡】平面形が円形の素掘りの井戸である。S X04道路跡と重複し、側溝を切っている。上端径が約1.5m、下端径が50cm、深さ1.4mで、壁は上方が開いている。堆積土は5層がみられ、いずれも自然堆積土である(第23図左)。

#### D. 溝跡

【S D16溝跡】南西方向に走る溝で、第1・3次調査で検出されていたものの南側への延びにあたる。上幅が85cm・下幅が25cm・深さは20～25cmである。底面は平坦で壁は緩



第22図 D-4区遺構配置図



層No	土色	土性	備考
1	黄褐色(10YR5/8)	砂質粘土	10~15cm大の塊が混じる。
2	灰オリーブ色(5Y4/2)	砂質粘土	
3	灰オリーブ色(5Y5/3)	砂質粘土	微量の炭化物を含む。
4	オリーブ灰色(5GY5/1)	砂質粘土	グライ化している。粘性あり。
5	青灰色(10BG6/1)	砂質粘土	グライ化している。粘性あり。

層No	土色	土性	備考
1	暗褐色(10YR3/3)	シルト	木根による攪乱多し。しまりなし。
2	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	地山ブロック・小礫を若干含む。しまりなし。
3	黄褐色(10YR5/8)	シルト	地山ブロックを含む。しまりなし。磁器片出土。
4	暗褐色(10YR3/3)	シルト	3層よりも地山ブロックの量が少ない。
5	黄褐色(10YR7/8)	粘土	地山ブロック。しまりあり。
6	黒褐色(10YR2/3)	シルト	地山ブロックと旧表土が混じる。7、8、10、13、14は地山ブロック主体で6、12はほぼ半々の割合。9、11は旧表土主体。しまりあり。
15	黄褐色(10YR7/8)	粘土	
16	黒褐色(10YR2/3)	シルト	旧表土。均質でしまりあり。粘性は少ない。

第23図 SE 103, SX 115断面図

やかに立ち上がっている。堆積土は褐色の砂質シルトである。

### E. 土塁

【SX 115土塁】SX 04道路跡の内側約1.8mに位置し、館の南辺を区画する施設と考えられる。調査区の西側に延びており、高まりとして観察することができる。削平を免れた一部が調査区にかかったものであり、断面を観察しただけで詳細な調査は行っていない。積み土は旧表土である黒褐色土を基底として内側から外側へと積み上げられ、内側では黒褐色土と黄褐色地山土が10cm前後の厚さで互層に積み上げられている。基底部の幅は3.9m以上(北側は削平され全体としての幅は不明)で、残存する高さは60cmほどである。なお、土塁の外側には暗褐色土に若干の黄褐色地山土が混じるしまりのないボソボソした崩壊土と考えられる堆積層が見られた(第23図右)。層No 4の上面から磁器片が出土している。

出土遺物(第25図6)

染付磁器丸皿で、内側面には蔓草文が配されている。置付け部分に砂粒の付着が見られる。肥前産で17世紀後半頃の製品と思われる。

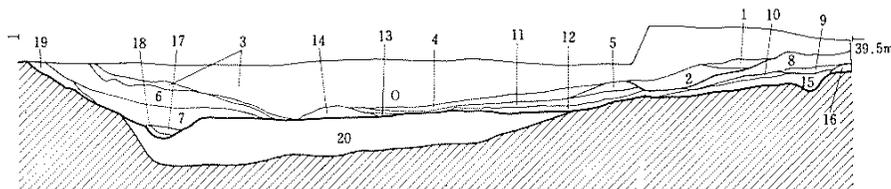
【SX 04道路跡】第3次調査でその一部が検出されたもので、今回の調査でもD-3区からD-4区にかけて直線的に連続する延びが検出された。館南脇の道路と考えた遺構である。一見溝状を呈し、中学校校地造成の際に厚さ0.6~1.3mの大規模な盛土が行われている(第24図整地)。道路には黒褐色あるいはオリーブ灰色の層が10~20cmの厚さで堆積しており、腐食した植物遺体を含んでいる。道路面は館内部の地山面よりD-3区で約60cm・D-4区で1.4m下がり、西側に向かって傾斜が見られる。館に連なる北側の肩は

約45°の角度で立ち上がり、途中に段状の部分が見られる。南側の肩は削平もあって明瞭ではない。D - 4区の道路の両側には幅50～60cm・深さ20cmほどの側溝が取り付け、南側では側溝の掘り直しが見られた(旧側溝を径20cmほどの円礫等で埋め、整地後その内側に新側溝を掘っている)。D - 3区では側溝を明瞭に確認することができなかった。道路幅は約5.0mで、側溝掘り直し後は約4.5mに縮小されている。なお、D - 3区の東側では地山を1m前後掘り下げた後、道路面まで埋め戻す地業が行われていた(第24図)。D - 4区南側旧側溝埋土中から陶磁器類・瓦・石臼などが出土している(第25・26図)。

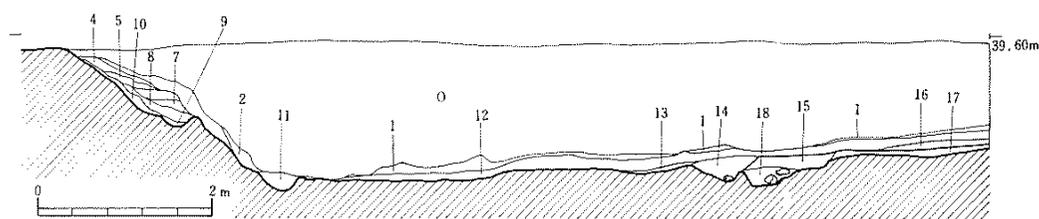
出土遺物(第25・26図)

a. 磁器(第25図1・2)

染付磁器丸皿である。1は口紅が施され、見込に草花文が描かれている。2は内側面に蔓草文が描かれ、見込文様は草花文であろうか。



層No	土色	土性	備考	層No	土色	土性	備考
0	浅黄色(2.5Y7/4)	粘土	地山ブロック・砕石等混じる盛り土。	11	暗褐色(10YR3/3)	シルト	炭化した木片を含む。
1	灰黄褐色(10YR6/2)	砂質シルト	地山ブロック・小礫を含む。	12	明黄褐色(10YR6/8)	シルト	小礫を多量に含む。底面堆積土。
2	灰黄褐色(10YR6/2)	砂質シルト	小礫・酸化鉄を含む。	13	ネリブ灰色(10Y6/2)	粘土	グライ化した粘土ブロック。底面堆積土。
3	灰黄褐色(10YR6/2)	砂質シルト	地山ブロック・小礫を含む。	14	黄褐色(10YR5/8)	粘土	地山ブロック。底面堆積土。
4	黒褐色(10YR2/3)	シルト	小礫を少量含む。	15	黄褐色(10YR5/8)	粘土	地山粒・小礫を多く含む。礫も混じる。
5	黄灰色(2.5Y5/1)	粘土	グライ化した腐食土。	16	暗褐色(10YR3/4)	シルト	地山粒を少量含む。
6	明褐色(10YR5/6)	シルト	地山粒・小礫を含む。	17	褐色(10YR4/4)	シルト	地山粒を含む。側溝堆積土。
7	黄褐色(10YR5/8)	粘土	地山粒・小礫を多く含む。礫も混じる。	18	黄褐色(10YR5/8)	粘土	地山ブロックを含む。側溝堆積土。
8	灰黄褐色(10YR5/2)	砂質シルト	酸化鉄を多く含む。礫も少量混じる。	19	暗褐色(10YR3/3)	シルト	地山粒を少量含む。
9	暗黄褐色(2.5Y5/2)	砂質シルト	酸化鉄を多く含む。地山粒が混じる。	20	黄褐色(10YR5/8)	粘土	地山ブロック・礫を多く含む。人為的埋土。
10	明黄褐色(10YR6/8)	粘土	小礫を多く含む。				



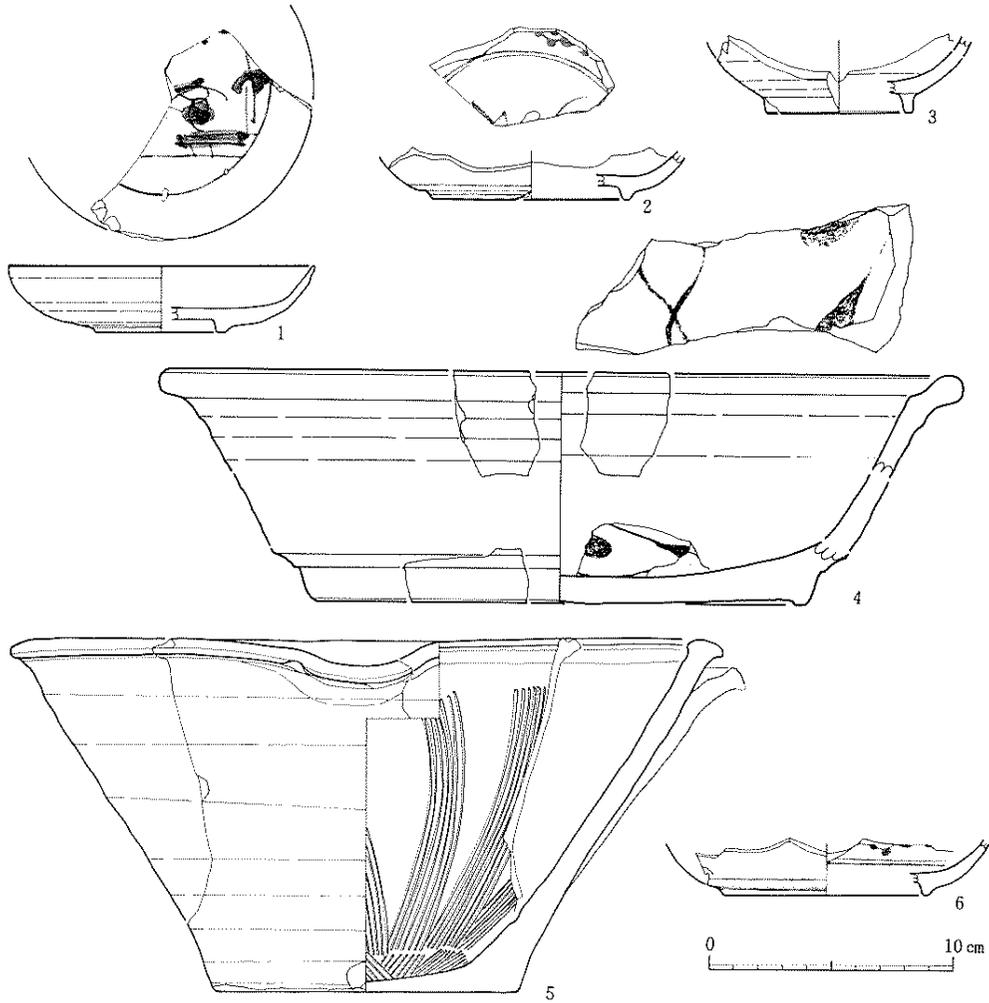
層No	土色	土性	備考	層No	土色	土性	備考
0	浅黄色(2.5Y7/4)	粘土	地山ブロック・砕石等混じる盛り土。	10	褐色(10YR4/4)	シルト	地山ブロックを含む。
1	黄灰色(2.5Y5/1)	シルト	グライ化した腐食土。	11	黄褐色(2.5Y5/3)	シルト	グライ化粘土ブロック・砂を含む。側溝堆積土。
2	にぶい黄褐色(10YR6/4)	シルト	酸化鉄を含む粘性が強い。	12	黒褐色(10YR3/2)	シルト	東側はグライ化。底面堆積土。
3	にぶい黄褐色(10YR6/4)	シルト	地山粒を少量含む。	13	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山ブロックを含む。底面堆積土。
4	黄褐色(10YR5/8)	シルト		14	にぶい黄褐色(10YR5/4)	粘土	地山ブロック・礫を含む。側溝堆積土。
5	明黄褐色(10YR5/8)	シルト	地山粒を多量に含む。黒色土も少量混じる。	15	にぶい黄褐色(10YR5/4)	粘土	地山ブロック・礫を多く含む。人為的埋土。
6	黄褐色(7.5YR7/8)	粘土	白色粘土ブロック・粒が若干混じる。	16	にぶい黄褐色(10YR7/2)	シルト	地山ブロック・礫を多く含む。人為的埋土。
7	明黄褐色(10YR6/8)	シルト	白色粘土ブロック・粒が若干混じる。	17	にぶい黄褐色(10YR5/4)	粘土	地山ブロック・礫を多く含む。人為的埋土。
8	黄褐色(10YR5/6)	シルト		18	にぶい黄褐色(10YR7/3)	粘土	地山・礫混じりの旧側溝埋土。
9	褐色(10YR4/6)	シルト					

第24図 S X 04断面図

この2点は肥前産で、17世紀後半頃の製品と思われる。

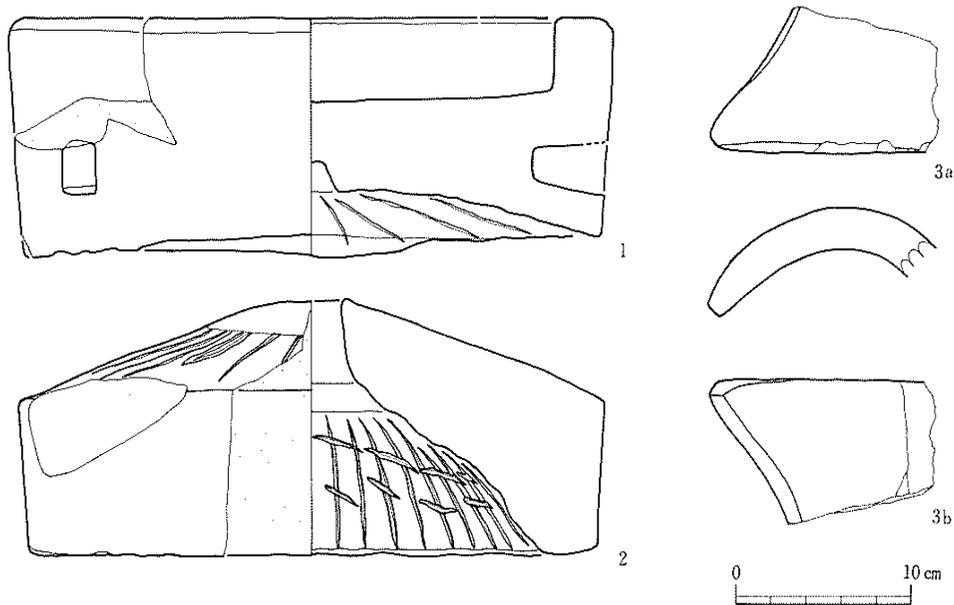
b. 陶器 (第25図3~5)

施釉陶器である。3は鉄釉が掛かった飯碗で細かな貫入が見られる。4は低い高台の付く折り縁の火鉢で、図は破片から復元したものである。釉は灰黄色の長珪石釉で墨付けを除いて掛けられ、見込には鉄絵で葦草文と思われる文様が描かれている。5は鉄釉の施された片口の摺鉢で、口縁端部が僅かに外側に摘み出されている。内面には8条単位の筋目



No	出土地区・層位	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴	産地	図版No
1	SX04西側倒溝 1	磁器皿	12.4	5.3	2.7	染付。口紅。見込に葦草文。	肥前	16-1
2	SX04西側倒溝 1	磁器皿		8.0	(2.1)	染付。外面腰部と高台、高台内に1条の墨線。内面に葦草文と2条の墨線。見込に葦草文?	肥前	16-2
3	SX04西側倒溝 1	陶器碗		6.0	(3.2)	鉄釉(色調: にぶい赤褐色5YR5/4)。細かな貫入あり。付高台。		
4	SX04西側倒溝 1	陶器大鉢	(32.7)	(20.1)	(9.3)	長珪石釉(色調: 灰黄色2.5Y6/2)。口縁一部に銅緑釉。細かな貫入。見込に鉄絵の葦草文?	英濃	16-3
5	SX04西側倒溝 1	陶器摺鉢	29.1	12.4	14.2	鉄釉(色調: 赤褐色10YR/3)。片口。7条単位の筋目。		16-4
6	土塁・層No 4	磁器皿		(8.3)	(2.3)	染付。外面腰部と高台に1条の墨線。内面に葦草文と2条の墨線。	肥前	16-5

第25図 SX04出土遺物(1)とSX115出土遺物



No	出土層位	器種	特徴	備考
1	西側側溝1	石臼（上臼）	安山岩製。径32.5~34cm、高さ12cm。上面に高さ4cm・幅3.3cmの縁が巡る。側面に把手取り付け用の一辺3cm・深さ4.2cmの孔。	16-6
2	西側側溝1	石臼（下臼）	安山岩製。径32~33cm、高さ13cm。上面に放射状の目。摩滅感が著しい。内面は製作時の削り痕が残る。	16-7
3	西側側溝1	棟込め瓦	全長・挟み幅は不明。広さ約13cm以上。厚さ1.5~2.2cm。凹面・凸面ともにナデ調整。	15-4

第26図 S X 04出土遺物（2）

が放射状に配され、底部は摩滅が著しい。

以上の陶器のうち、2・4は17世紀前半頃の美濃の製品と思われるが、3については産地・年代ともに不明である。

#### c. 瓦（第26図3）

棟込め瓦である。丸瓦を横に半割り、側辺を切りとったもので、平面形は上辺が幅狭い台形状を呈するものと思われる。年代については不明である。

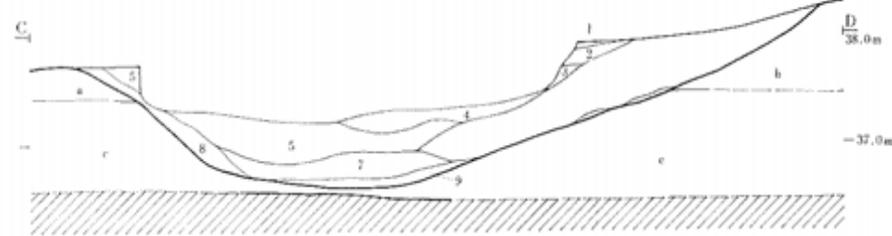
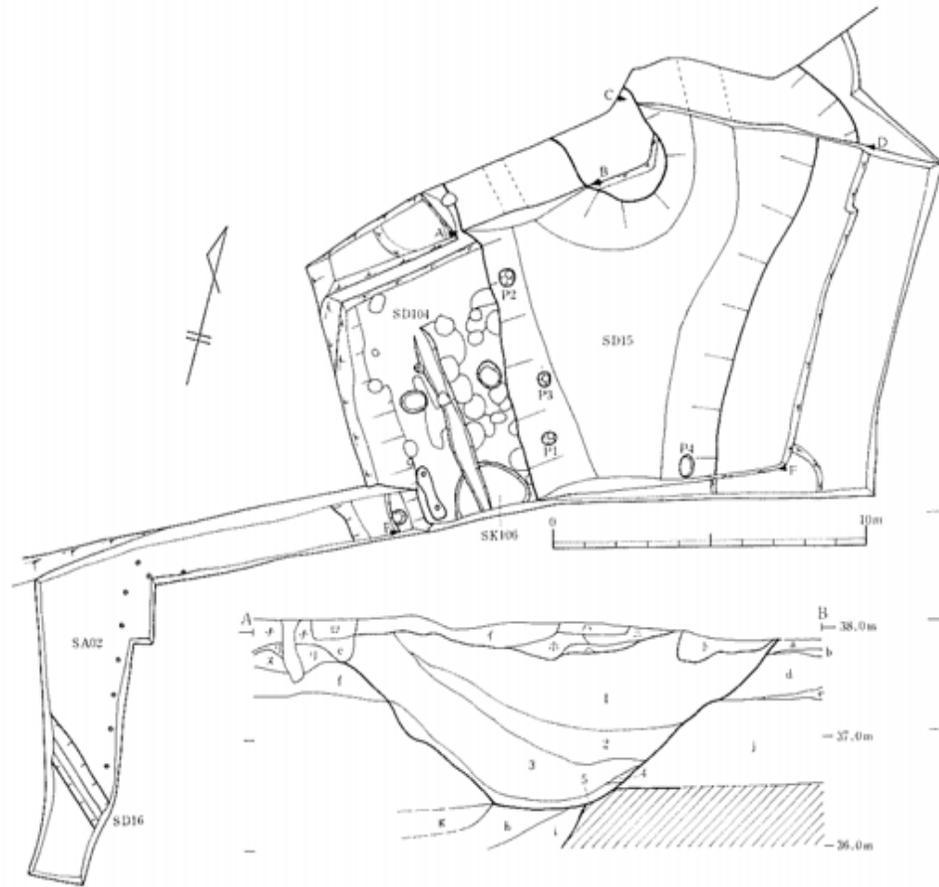
#### d. 石臼（第26図1・2）

1は上臼である。上面には幅・高さともに3.5cmほどの縁が巡り、下面には不規則な目が刻まれている。また、下面中央部には軸受け用のほぞ穴が切られ、側面の下半部には平面形が一辺3.5cmの正方形で、深さ4.8cmの把手用の孔が1個穿たれている。

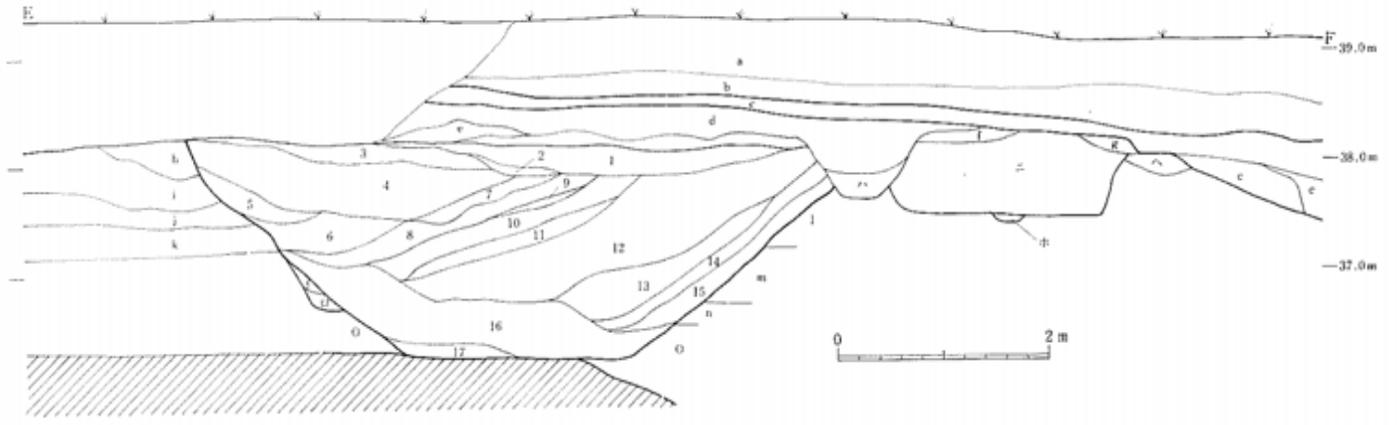
2は下臼である。上面には放射状の目が見られるが、使用による摩滅が著しく、残存状況は不良である。中央部に軸受け用の孔が穿たれている。下面には製作時の粗い削り痕が残されている。

これらは石材（安山岩）・法量ともほぼ同じことから組み合う一体のものと思われる。

な



層No	土色	土性	備考	層No	土色	土性	備考
a	色(1)0984/0	砂質シルト	地山ブロックを多く含む。	4	色(1)0983/0	シルト	褐色・地山ブロックを多く含む。
b	色(1)0984/0	粘土質シルト	褐色土ブロックを多く含む。礫を含む。	5	色(1)0984/0	粘土質シルト	褐色土ブロック・礫を多く含む。
c	色(1)0982/0	砂質シルト	礫を若干含む。	6	灰黄 色(1)0984/0	砂質シルト	礫を多く含む。酸化鉄染みあり。
1	色(1)0984/0	シルト	褐色土ブロック・砂・礫を含む。	7	色(1)0984/0	粘土質シルト	5層より褐色土ブロックの混じりが多い。
2	色(1)0983/0	シルト	地山ブロック・砂・礫を含む。	8	色(1)0984/0	砂質シルト	礫・砂を多く含む。
3	にぶい黄 色(1)0985/0	砂質シルト	褐色土ブロック・砂・礫を含む。	9	色(1)0984/0	シルト質砂	褐色土ブロックを若干含む。



層No	土色	土性	備考	層No	土色	土性	備考
a	色(1)0985/0	シルト	地山ブロックを多く含む盛り上。	4	色(1)0984/0	砂質シルト	5層と型地層1層の混じり。
b	黄 色(1)0985/0	シルト	礫を含む盛り上。	5	色(1)0984/0	砂質シルト	混じりのない均質上。
c	明黄 色(1)0985/0	シルト	地山ブロック・礫を含む盛り上。	イ	色(1)0984/0	砂質シルト	小礫を多く含む。
d	明黄 色(1)0985/0	シルト	地山ブロック・礫を含む盛り上。	ロ	色(1)0984/0	砂質シルト	地山ブロックを多く含む。礫・小礫も若干混じる。
e	色(1)0984/0	砂質シルト	4層に比して地山ブロックの割合が多い盛り上。	ハ	色(1)0984/0	砂質シルト	礫を多く含む。砂片を含む。
f	色(1)0984/0	砂質シルト	地山ブロックを含む層と褐色土ブロックを含む層の互層	ホ	色(1)0984/0	砂質シルト	地山ブロック・礫を含む。
g	色(1)0984/0	砂質シルト	大きな地山ブロックを多量に含む。	ヘ	色(1)0983/0	砂質シルト	褐色シルトブロックを多く含む。
h	明黄 色(1)0982/0	砂質シルト	地山小ブロックを極めて多く含む。	ト	黒 色(1)0983/0	シルト	地山ブロック・空孔を多く含む。
i	明黄 色(1)0982/0	砂質シルト	礫を若干含む。	チ	色(1)0984/0	砂質シルト	砂質・小礫を多く含む。
j	色(1)0984/0	砂質シルト	礫を若干含む。	リ	色(1)0984/0	砂質シルト	地山ブロック・礫を多く含む。
1	色(1)0983/0	砂質シルト	黄褐色土ブロックを多く含む。	フ	黄 色(1)0985/0	砂質シルト	褐色土ブロックが若干混じる。
2	色(1)0984/0	砂質シルト	砂片・小礫を含む。酸化鉄の染みあり。				
3	色(1)0983/0	砂質シルト	1層に相当。				

層No	土色	土性	備考	層No	土色	土性	備考
a	色(1)0984/0	シルト	黄土・砂・地山ブロックを多く含む盛り上。	5	色(1)0984/0	砂質シルト	4層より黄褐色土が多い。
b	にぶい黄 色(1)0985/0	シルト	明黄褐色砂片を多量に含む盛り上。	6	色(1)0984/0	砂質シルト	褐色土ブロックを多く含む。
c	にぶい黄 色(1)0985/0	砂質シルト	灰化物・小礫を含む。石灰土の混入あり。	7	色(1)0984/0	砂質シルト	5層と同様。
d	にぶい黄 色(1)0985/0	砂質シルト	地山・黄褐色土等の小ブロックを多量に含む盛り上。	8	色(1)0984/0	砂質シルト	6層に似るも黄褐色土が多い。
e	にぶい黄 色(1)0985/0	砂質シルト	d層に比して地山ブロックの割合が多い盛り上。	9	色(1)0984/0	砂質シルト	7層とほぼ同。
f	にぶい黄 色(1)0985/0	砂質シルト	小礫・砂・黄褐色土小ブロック等を含む。下部に酸化鉄の染み。	10	色(1)0984/0	砂質シルト	8層とほぼ同。
g	にぶい黄 色(1)0985/0	砂質シルト	地山ブロックを含む。	11	色(1)0984/0	砂質シルト	8層とほぼ同。
h	色(1)0983/0	砂質シルト	地山小ブロック・黄褐色土小ブロックを極めて多く含む。	12	色(1)0983/0	砂質シルト	6層とほぼ同。下部がライ化。
i	色(1)0984/0	砂質シルト	地山ブロック・褐色土ブロックを極めて多く含む。	13	色(1)0984/0	砂質シルト	8層とほぼ同。
j	色(1)0984/0	砂質シルト	1層に似るが黄褐色土ブロックを多く含む。	14	色(1)0984/0	砂質シルト	6層に似る。黄褐色土ブロックが多い。
k	色(1)0984/0	砂質シルト	地山ブロック・褐色土ブロックを若干含む。	15	色(1)0984/0	砂質シルト	6層とほぼ同。
1	明黄 色(1)0985/0	シルト	礫・小礫を若干含む。	16	色(1)0984/0	砂質シルト	地山ブロック・砂片が多い。
m	明黄 色(1)0983/0	砂質シルト	褐色土ブロック・小礫を若干含む。	17	イリイ 黄(1)0983/0	シルト質砂	全体がライ化。
n	明黄 色(1)0983/0	砂質シルト	地山ブロック・黄褐色土ブロックを多く含む。	イ	黄 色(1)0983/0	シルト	
o	明黄 色(1)0982/0	砂質シルト	石灰土。均質でしまりは少ない。	ロ	黄 色(1)0982/0	砂質シルト	地山ブロックを含む。
1	にぶい黄 色(1)0985/0	砂質シルト	小礫・砂を多く含む。	ハ	色(1)0984/0	砂質シルト	4層に相当。
2	にぶい黄 色(1)0985/0	砂質シルト	地山ブロックを多く含む。	ニ	色(1)0984/0	砂質シルト	黄褐色土・地山ブロックを含む。
3	にぶい黄 色(1)0985/0	砂質シルト	地山ブロックを含む。小礫・砂を多く含む。	ホ	色(1)0984/0	砂質シルト	ニに似るも混じりが多い。
4	色(1)0984/0	砂質シルト	地山・黄褐色土小ブロックを均等に含む。小礫を含む。	ヘ	にぶい黄 色(1)0985/0	砂質シルト	若干の砂片が混じる。

第27図 D-5区遺構配置図とS D15断面図

お、石臼は中世以来の形態的な変化が明確でなく、年代については特定できない。

## D - 5 区

この調査区は第3次調査C - 1区の西側に隣接する地区である。調査区の西端は約3mの比高差がある急斜面で、下位の平坦面は稻荷神社の敷地になっている。

### 発見された遺構と遺物

発見された遺構は土壌1基、溝跡2条、整地地業、ピットなどである(第27図)。遺物は溝・ピットから陶磁器の破片が数点出土しただけで、図化できた資料はない。

#### A. 土壌

【SK105土壌】SX116整地地業に覆われ、SD104溝跡・SX117整地地業を切っている。平面形は円形基調で、残存部での規模は長軸2.35m・短軸1.4m・深さ75cmである。堆積土は褐色シルトで黒褐色土や黄褐色地山土のブロックが混じっている。

#### B. 溝跡

【SD104溝跡】東西方向に走る溝跡で、調査区の途中で切れている。SX117整地地業を切り、SK105土壌に切られている。幅は35～65cm、深さは20～30cmである。堆積土は褐色シルトで多量の黄褐色地山ブロックと小礫・焼土が混じっている。

【SD15溝跡】第3次調査で検出された溝跡の西側への延びにあたり、SX117整地地業を掘り込んでいる。調査区の東側では上幅約6.5m・下幅2.0m・深さ2.0mであるが、西側では南北の二股に分かれ、南側は上幅4.3m・下幅0.9m・深さ1.6m、北側は上幅約7.0m・下幅1.5m・深さ1.6mである。底面はほぼ平坦で、壁の立ち上がりは西側の北溝北側が底面から15°ほどの傾斜で緩く、他では35～40°の傾斜である。堆積土は褐色・暗褐色などのシルトに黄褐色地山ブロックや小礫を含むもので、5～17層に細分された。底面から施釉陶器破片が出土しているが、細片のため器種・産地・年代は不明である。

#### C. 整地地業

【SX116整地地業】SD15溝跡が埋まってからの整地地業で、中学校造成時の盛土(第27図表の整地)より古いものである。にぶい黄褐色砂質シルトに黄褐色地山ブロックが多量に混じる層で、40cmほどの厚さがあり、南側に下りながら広がっている(整地)。

【SX117整地地業】SD15溝跡に切られる規模の大きな整地地業である。旧表土あるいは地山上に褐色暗褐色などのシルトに黄褐色地山ブロックや小礫・礫などを含む層が10～80cmの厚さで3～7層積まれているもので、全体として1～1.6mの厚さがある。この整地は第3次調査で検出されたSX01池跡の西側に広く認められるもので、西側に向かって傾斜する丘陵斜面を平坦面とするための地業と考えられる。なお、調査区の南側は攪乱され

ゴミ捨て場となっており、整地地業の南側への広がりには把握できなかった。

#### D.ピット

SD15の壁面を掘り込むピットが4個検出されている。径30～50cmの円形のピットで、深さはピット1・2が約1m、ピット3・4がそれぞれ約60cm・50cmである。堆積土は前者が褐色砂質シルト、後者が暗褐色・黒褐色シルトで、ともに黄褐色地山ブロックを含んでいる。なお、いずれからも柱痕跡は検出されなかった。

#### D - 6 区

この調査区はD - 1区の北側に位置し、館の北東隅に近い部分にあたる。幅1.3m・長さ48mのトレンチを設定し掘下げたところ、地表面下にグラウンド造成に係る25～30cmの盛土整地層が見られ、その下は削平された地山面であった。

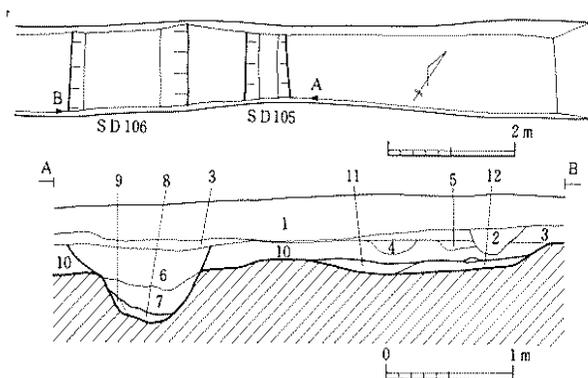
#### 発見された遺構と遺物

調査区北寄りで平行する2条の溝跡が検出された(第28図)。遺物は出土していない。

#### 溝跡

【SD105溝跡】中学校造成時の盛土を切る新しい溝である。上幅0.8～1.1m、下幅40cm、深さ50cmである。底部はやや凹凸があり、壁は比較的急に立ち上がる。堆積土は暗褐色・褐色のシルトで、大部分が人為的に埋められている。

【SD106溝跡】盛土下の地山面で検出され、上幅1.8～1.9m、下幅1.2m、深さ10cmである。底部はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は地山粒を含む暗褐色のシルトである。



第28図 SD105・106

層No	層の特徴	備考
1	褐色の砂層で地山小ブロックが多く混じる。	1・3はグラウンド造成の盛土整地層。
2	炭化物を含む灰色の砂層。	
3	灰色・黄褐色の砂層。	
4	明黄褐色の粘土層で多量の小石が混じる。	2は溝か？
5	明黄褐色の粘土層で多量の小石が混じる。	人為的埋土。溝か？
6	暗褐色シルト層で多量の地山ブロックが混じる。	人為的埋土。
7	暗褐色シルト層で多量の酸化鉄が混じる。	
8	暗褐色シルト層。	SD105 堆積土。
9	褐色の粘土層。	
10	暗褐色シルト層で多量の地山ブロックが混じる。	中学校造成時盛土
11	暗褐色シルト層で多量の地山粒が混じる。	SD106 堆積土。
12	11層に似ているが地山粒の混じりが少ない。	

## 4. 考 察

上野館跡第4次調査で発見された遺構と遺物について前項までに述べてきた。ここでははじめに記録として残されている上野館跡についてまとめ、次に発見された遺構・遺物の主なものについて検討を加えてみる。

### (1) 記録に見られる上野館跡

上野館跡は寛永8年(1631)に茂庭家初代良元の下屋敷として築かれ、二代定元の明暦3年(1657)には作事を行い正式に居館として仙台藩の許可を受け、明治維新まで約230年の存続期間をもっている。館跡の規模を示す資料としては写真図版1に示す寛永年間の絵図・天和元年(1681)の絵図などがあり、前者では東西4間・南北68間、後者では東表85間・西裏84間・北脇72間・南脇67間で西南隅に東西4間・南北15間分の切り込みが示されている。また、表門は幅5間で屋根には鯨を飾り、館の四方には高さ1丈余の土塁と幅5間の道路が巡っていたとされている(茂庭家記録)。

第29図は明治39年に作成された幕末期の館内の建物配置を示す平面図である。仙台藩士の居館は領内統治の政治および儀式の場である大書院と大広間の2つの建物を中心として構成される「表」の建物群と、当主の居所である御座ノ間等からなる「奥」の建物群から構成され(佐藤:1979)、上野館跡では表門を入れて左側に「表」の建物群が、右奥北西隅の一角に「奥」の建物群が位置し、藩主来訪の際に使用される「御成書院」が「表」の建物群の背後に位置している。

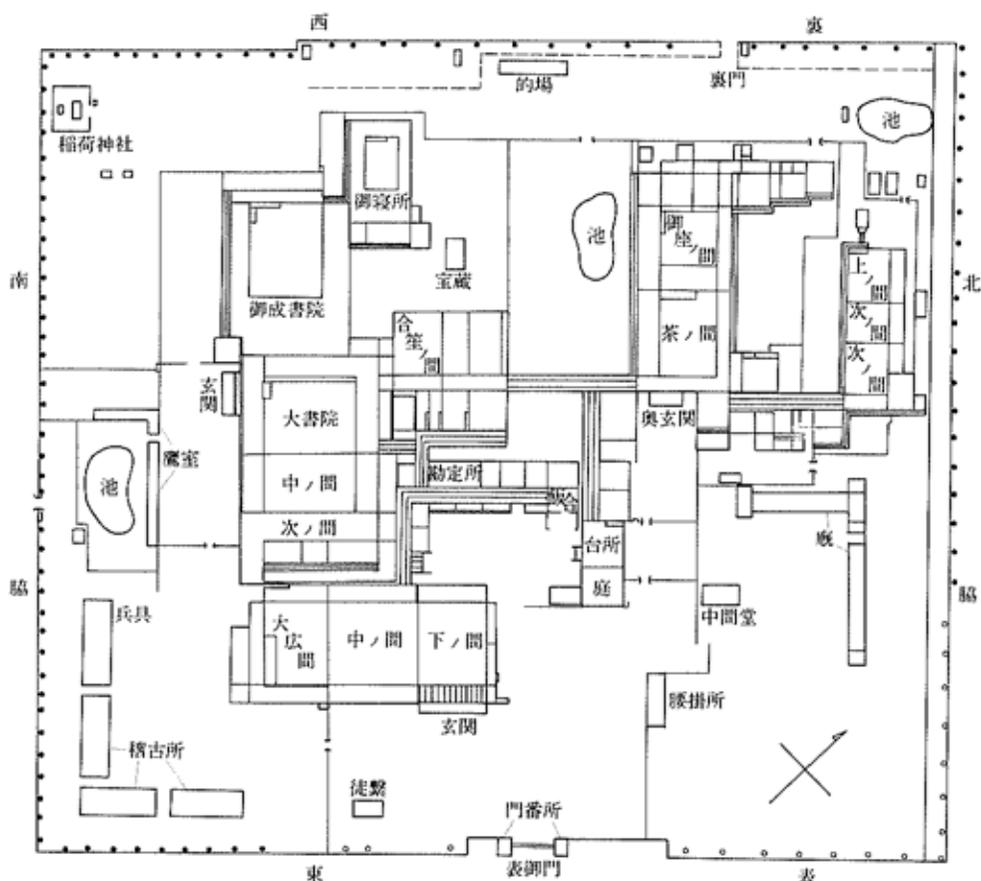
これらの建物群は下屋敷当初からその全容を備えていた訳ではなく、茂庭家記録に依ると貞享2年(1685)ころまでは簡素なものであったとされている。館内の大きな普請としては三代姓元の元禄元年(1688)の大書院・御広間・御座ノ間等の普請が知られ、このころに館内の建物は一新されたようである。また、元禄9年(1697)には稻荷神社の造営、元文元年頃(1736)には駒池等の大手(入口部分)の普請が行われ、元文2年(1737)には御成書院の存在等が知られる。

なお、これらの他にも館内の建物跡には全面あるいは部分的な改修を含む何回かの変遷があったものと考えられるが、記録からは明らかにされていない。

### (2) 発見された遺構について

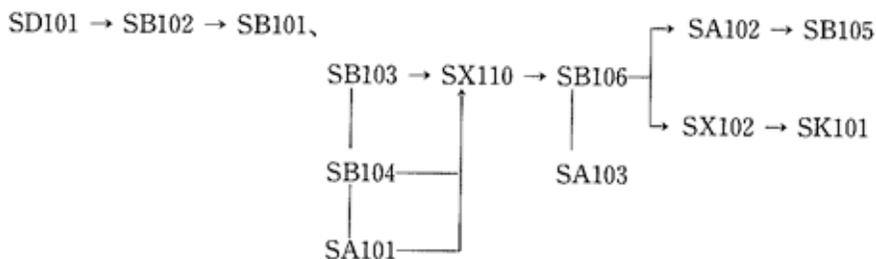
前項では記録に見られる上野館跡について述べたが、ここでは発掘によって明らかにされた遺構について、表門周辺の調査区であるD-1区を中心に若干の検討を行ってみたい。

D-1区で検出された遺構はS B 101 礎石建物跡、S B 102~107掘主柱建物跡、S A 101



第29図 松山旧城平面図（明治39年作成） 松山町史より抜粋

～103柱六列、SD101溝跡、SX101通路跡などであるが、全容を把握できたものはなく、遺構に伴う出土遺物も極めて少ない。検出された各遺構には次のような重複関係が見られた。



ところで、第29図でこの地区の遺構を見ると、表門以外には両脇の門番所が見られる程度であり、建物跡の希薄な部分となっている。天和元年の絵図によると表門は屋根に鯨が飾られる瓦葺きのものであり、おそらく礎石建物跡と考えられる。該当する遺構として

は根固め石が残るS B 101が考えられるが、その残存状況は削平が著しく、実体としては不鮮明なものである。

次に掘立柱建物跡について見ると、S B 101の西側にこれと柱筋を揃えるS B 103が位置し、その北側に6mの間隔を置いて柱筋を揃えるS B 104が位置している。この2棟の建物跡を一体となる建物跡とした場合、その規模は東西に5間(検出された部分での柱間隔は2m・6m=3間分・2m)・南北に2間となり、東西の間数は絵図に示されている表門の規模に一致し、中央の3間分はS X 101通路の幅ともほぼ一致している。

S B 103・104はこの地区で最も古い段階の建物跡であり、位置等も含めS B 101以前の掘立柱式の表門(長屋門形式?)=下屋敷段階の表門であった可能性を示す遺構とも考えられるが、不明な部分も多く解釈は難しい。

また、S B 106であるが、S B 103・104廃棄後の整地地業S X 110を切る建物跡であり、その南妻はS X 101通路跡まではみ出し、この段階で表門からの通路は南側に移動したことが考えられる。S B 106はS B 103と柱筋を揃えるS B 101が表門であった段階の遺構で、幕末期の平面図にその存在がないことから、幕末以前のある段階で取り壊されたものと推測される。

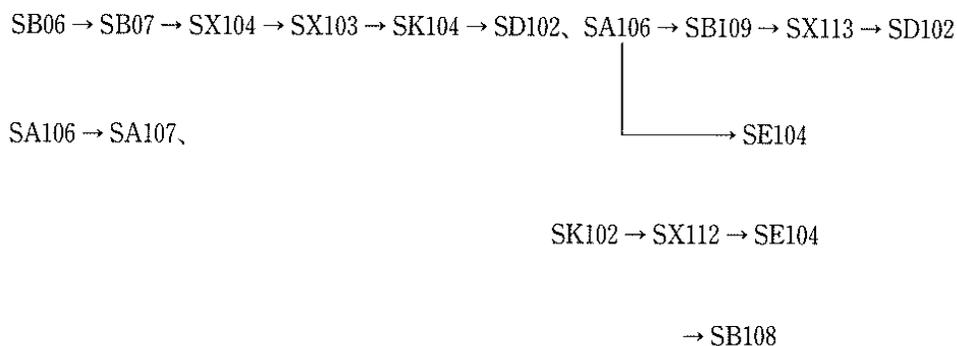
次に、S B 102・107であるが、S B 102についてはS B 101よりも古い段階の遺構と考えられ、S B 103よりも古い段階の表門の可能性を残している。また、S B 107はいわゆる「表」の建物群の一角を構成する遺構と考えられる。この「表」の建物群は元禄元年頃に大規模な普請が行われているが、A - 1区での調査成果からみると、この段階ですべての建物跡が掘立柱式から礎石立式に変わった可能性は下屋敷時代から僅か50数年で3~4段階に変遷する掘立柱式建物跡の重複関係からは理解しがたいものがある。おそらく、元禄年間以降にも大なり小なりの普請があって、ある段階で礎石立建物に変わるものがあつた程度の理解しか現段階では無理であろう。

これらの遺構については今後体育館の解体に伴って発掘調査が行われる予定になっており、その全容が明らかになった時点で検討を加えることとしたい。

なお、S B 105については掘立柱建物跡としたもののその構造・性格の理解には難しいものがある。馬繋ぎの施設の可能性もあるが、類例を待って今後の検討課題としたい。

最後に、その他の調査区で検出された主な遺構について見てゆくことにする。

D - 2・3区で検出された近世の遺構はS B 06・07・108掘立柱建物跡、S A 104~107柱穴列・S B 109門跡・S K 102・104・105土壇・S E 101・102・104・105井戸跡・S D 102・103溝跡・S X 103・104竪穴状遺構・S X 112~114整地地業などで、これらには以下のような重複関係が見られた。



このうち、出土遺物の検討から S X 104 は 18 世紀前半頃までの、S X 103 は 19 世紀前半頃までの、S B 109 は 19 世紀前半頃の遺物を含むことから、S B 06・07 は概ね 18 世紀前半頃までの建物跡で、元禄元年の大普請以前の建物跡である可能性が高い。S B 06 については大規模な建物跡の一室と捉えていた(伊藤:1990)が、北・西側への伸びは認められず、四方に縁あるいは廊下が巡る独立した建物跡と考えられる。また、S A 106 は概ね 19 世紀前半以前の柱穴列と捉えることができ、その重複関係から S B 109 門跡が機能した段階にも塀跡として機能していた可能性が考えられる。

なお、来年度以降の調査区まで延びる S B 108・S A 104 などの遺構については今後の成果を待って検討したい。

D - 4・5 区の主な遺構としては館跡の南脇を区画する施設である S X 115 土塁、その外側の一段低い S X 04 道路跡および側溝、S A 108 柱穴列、西脇に延びる S D 15 溝跡、大規模な S X 117 整地地業などがあり、重複関係は S X 117 S D 15 が見られた。

S X 115・S D 04 は館跡の外郭を構成する遺構であり、館構築の設計に伴う当初からの遺構と考えられる。検出された道路幅は 4.5~5.0 m で天和の絵図に記されている道路幅 5 間のほぼ半分の規模であった。また、土塁については断面観察であるが、基底部幅が 4m 前後・積土は削平・崩壊により 60 cm ほどが残る程度であった。

次に S A 108 であるが、土塁が南側方向に直線的に延びていたとすると重複する位置にあたる。天和の絵図では土塁を切る遺構として南門が見られるが、位置的には可能性があるものの S A 108 を南門とする積極的な理由を発掘の結果から導き出すことは難しい。

最後に S X 117・S D 15 について述べる。S X 117 は S X 01 池跡の西北側に広く見られる整地地業で西端では厚さ 1~1.6m で 3~7 層に細分される。この整地地業は大規模な土木工事であり、元禄元年の大普請あるいは元文 2 年には存在する御成書院に建設と係わりをもつものと推測される。S D 15 については整地地業後の溝であるが天和の絵図・幕末期の平面図には見られない遺構である。通路としての機能も考えられるが、性格については北側

の延びが明らかになった時点で検討してみたい。

### (3) 出土遺物について

出土遺物には陶器・磁器・土師質土器・瓦質土器・焼塩壺・瓦類・硯・石臼・煙管・銭貨などがあつた。これらは17世紀前半～19世紀代まで、すなわち館跡が機能していた時期の遺物である。

産地の明らかなものについてみると、陶器は17世紀を通して瀬戸・美濃産の碗・皿類が見られ、17世紀後半から肥前産の京焼風陶器深皿が混じってくる。また、19世紀代のものとしては大堀相馬産の碗・灰吹き・土瓶が見られる。磁器は一貫して肥前産が主体を占め、碗・皿類が多い。土師質土器は灯明皿(カワラケ)が多く、瓦質土器は鉢類である。これらは在地産の可能性が考えられ、後者は仙台城三ノ丸跡出土の堤焼との関連が指摘されている(結城ほか：1985)。

次に、出土遺物の中から県内では他に出土例がない京焼風陶器と、類例の少ない焼塩壺を取り上げ、若干の検討を加えてみたい。

#### A．京焼風陶器について

京焼風陶器とは肥前で焼かれた京焼の類似品で、唐津が京焼から最も強く影響を受けた17世紀後半～18世紀前半の製品とされるものである(大橋：1989)。

本遺跡ではD-2区のS X 104竪穴状遺構の堆積層(第16図12・13、第17図1・2)、S X 113整地層(第20図2)からいづれも深皿が出土しており、第3次調査でもC-1区S K 05土壌から深皿が1点出土している(伊藤：前掲第25図3)。これらは平滑に仕上げられた高台内に浅い円刻と押印を持つのが特徴で、「森」「柴」などの印が見られる。高台部を除いて淡黄色等の釉が掛けられ、見込には錆絵で山水文が描かれている。

ほぼ同様の押印・文様の描かれている製品は鍋島藩窯跡出土遺物の中に見られ(大橋：前掲)、本遺跡のものも同窯跡で焼かれた可能性がある。また、消費地での例としては東京都立上野高等学校敷地内の東叡山寛永寺護国院旧墓地跡の寺院関係遺構からの出土が知られる(谷川ほか：1988)。

#### B．焼塩壺について

焼塩壺は粗塩から食卓塩のような精製塩である焼塩作りに用いられた土師質の素焼の容器である。焼塩は粗塩を蓋付の焼塩壺に入れ、窯の中で蒸焼にすることで作られ、容器のまま消費者に商品として販売された。また、容器には産地を示す押印が標される例がある。

出土遺跡は京都が圧倒的に多く、東京・大阪・福岡・兵庫がこれに続いている。北は青森県から南は熊本県まで分布が見られ、京都では公家や武家の屋敷跡・有力な寺社跡や料

亭跡等に集中し、東京では城跡・武家の屋敷跡・有力な寺社跡が多く、地方では圧倒的に城跡に集中している。これらのことから焼塩壺は使用者の階層性をはっきりみることができる貴重な遺物と言われている（渡辺：1983・1985a・1985b、鈴木：1985）。

本遺跡ではD-2区のS X 103竪穴状遺構の堆積層（第14図3・4）、S X 104竪穴状遺構の堆積層（第17図12～15）、S X 113整地層（第20図3）、第3次調査C-1区S X 01池跡の南側から身が出土しており（伊藤：前掲第28図4）、以下のような特徴が見られる。

1. 製作にロクロを使用し、底部に回転糸切り痕を残すこと。
2. いわゆるコップ形を呈し、口縁部等に屈曲がないこと。
3. 器壁が1cm前後と厚く、二次焼成痕が明瞭なこと。
4. 外面に斜格子状のタタキ目が見られること。
5. 押印等が見られないこと。

また、細部では底の厚さが1cm前後のものから4.5cmと厚いものまであり一定しないこと、タタキ目に大小があることなどが挙げられる。

県内では仙台城三ノ丸跡の遺構から身31点・蓋1点一が出土しており、その中に3類とされタタキ目を持つ焼塩壺が1点だけ含まれている（結城ほか：前掲第114図13）。これは肩部がくびれ、口縁部が短く直立する壺形のもので、ロクロ成形になるものとされる。他には輪積み成形のコップ形で、口縁部内側が削がれたように薄くなる1類、ロクロ成形・糸切り底で体上部に小さなくびれを持つ2類が見られ、1・2類は 期（慶長6年～寛永14年）の遺構で供伴し、1類から2類へと変化した可能性が考えられるとしている。なお、3類についてはタタキ目が気になるが、形態的に古い要素をもっており 期のものである可能性が高いとしている。

次に、渡辺誠氏の研究（渡辺：前掲）を基に、生産地等を含めた検討を行ってみる。

渡辺氏は京都・東京の遺跡から出土した焼塩壺の形態をもとにA～Lの12類の分類を行い、製作方法の差異は生産地と密接に係わるとしている。これらにはタタキ目の見られるものはない。本遺跡例の特徴1～3は播州赤穂産とされるI・J類に共通し、年代としては上限が17世紀末まで遡る可能性があり、下限は今世紀まで下る可能性があると考えられ、東京都内の遺跡に出土がやや多いとされている。

なお、仙台城三ノ丸跡出土の3類は形態的にはG類（伏見産で16世紀末を上限とし、17世紀～18世紀のものとして推定され、輪積み法で作られている）に、1類はA類（泉州堺湊産の16世紀中頃～17世紀後半のもので、輪積み法で作られている）に似ているが、2類に類似するものは提示されていない。

仙台城三ノ丸出土例を見る限り、ロクロ成形で糸切り底の焼塩壺が17世紀前半には確實

に存在することは明らかであり、タタキ目を持つ類型を含めたこれらの産地が大きな問題となる。文化庁記念物課の岡村道雄氏からは都内の数多い遺跡調査でもタタキ目を持つ焼塩壺の出土例はないとの教示を受け、関西一円の塩の生産地とともに地元産である可能性も考えるべきではとの指摘も受けている。

宮城縣史9(只野：1968)によると仙台藩初期の塩の主な生産地は亘理部箱根田浜、名取郡相ノ釜・同北釜、牡鹿郡石巻・同渡波、本吉郡階上などである。風土記御用書出では亘理郡各浜の製塩は元和年中に開始され、その仕方は播州流とあり、縣史では名取郡、牡鹿郡石巻も同様の方法であった可能性が指摘されている。また、牡鹿郡渡波では下総国行徳に行われている方法を採用し、寛永3年から開始とあり、本吉郡階上では古来は駿河流であったと記されている。

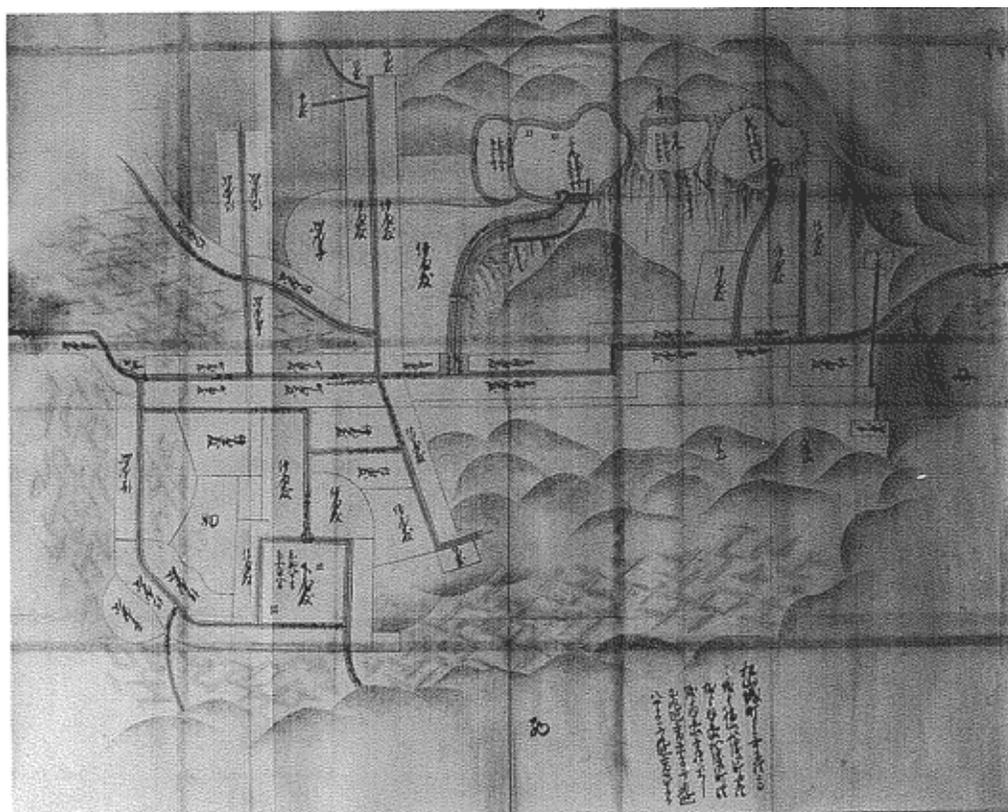
生産量については慶長～元和年間では領内の製塩量が少なく、他領よりの移入塩に依存していたが、一応の量産の見通しがついた寛永3年(1626)には塩専売制が布かれたとされている(只野：前掲)。

専売制が布かれる以前には高級塩である焼塩は搬入品であり、畿内の製品が持ち込まれたであろうが、この段階で高級塩である焼塩が藩内で生産された可能性は充分考えられよう。そして、タタキ目を持つ焼塩壺・畿内の焼塩壺に形態が似て製作技法が異なる焼塩壺はこうした動きの中で生まれた可能性も考える必要がある。さらに、未だ量的保証に欠けるものの、これらが現在のところ仙台藩内の2遺跡にその出土が限られていることは、こうした推測を充分裏付けてくれるものであり、今後の調査による資料の増加、類例の蓄積を待って、さらなる検討が必要と考えられる。

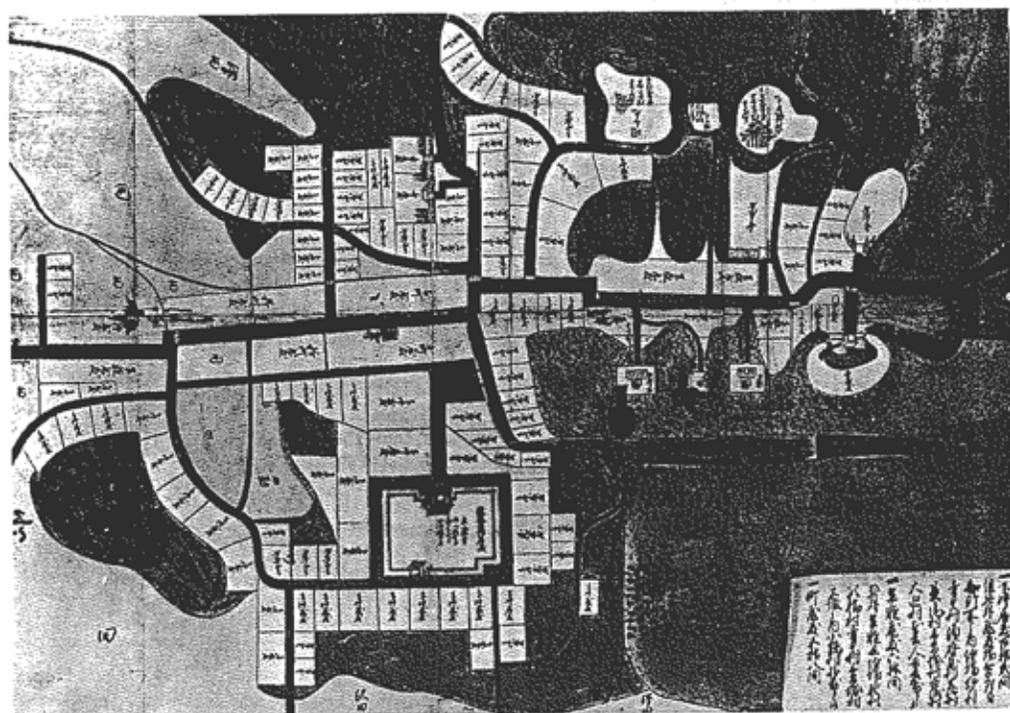
## 引用参考文献 (五十音順)

- 伊藤 裕 1990 『上野館跡』 宮城県文化財調査報告書第 139集
- 扇浦正義ほか 1988 『三栄町遺跡』 東京都新宿区教育委員会
- 大橋康二 1984 『窯ノ辻・ダンバギリ・長吉谷』 佐賀県立九州陶磁文化館
- 1985a 『百間窯・樋口窯』 佐賀県立九州陶磁文化館
- 1985b 『肥前磁器の流れ』 『季刊考古学第18号 特集 江戸時代を掘る』  
pp.75~78 雄山閣
- 1986 『南川原窯ノ辻窯・広瀬向窯』 佐賀県立九州陶磁文化館
- 1987 『楠木谷窯・小溝上窯』 佐賀県立九州陶磁文化館
- 1989 『肥前磁器』 ニューサイエンス社
- 梶原洋ほか 1985 『東北大学埋蔵文化財調査年報1』 東北大学埋蔵文化財調査委員会
- 小泉 弘 1983 『江戸を掘る・近世年考古学への招待』 柏書房
- 1985 『江戸の町の出土遺物』 『季刊考古学第18号 特集 江戸時代を掘る』  
pp.51~55 雄山閣
- 佐藤 巧 1979 『近世武士住宅』 叢文社
- 鈴木重治 1985 『堺の焼塩壺』 『技術と民俗(上巻) = 海と山の生活技術誌 = 日本民俗文化大系 第13巻』  
pp.626・627 小学館
- 関野 貞 1936 『瓦』 考古学講座18 雄山閣
- 芹沢長介ほか 1981 『日本やきもの集成 北海道・東北・関東』 平凡社
- 高山 優ほか 1987 『芝神谷町屋敷遺跡』 森ビル開発株式会社 港区教育委員会
- 1988a 『白金館址遺跡』 白金館址遺跡調査会
- 1988b 『白金館址遺跡』 白金館址遺跡調査会
- 只野 淳 1968 『仙台領内製塩略史』 『宮城縣史9 - 産業』 pp.682~722 宮城縣
- 谷川章雄監修 1988 『東叡山寛永寺護国院』 都立上野高等学校遺跡調査会
- 富岡儀八 1985 『塩の流通と塩商人』 『講座・日本技術の社会史 第二巻 塩業・漁業』  
pp.346~364 日本評論社
- 西田宏子ほか 1988 『古伊万里 別冊太陽 日本のこころ63』 平凡社
- 藤沼邦彦ほか 1987 『硯沢・大沢窯跡ほか』 宮城県文化財調査報告書第116集
- 茂庭邦元ほか 1980 『第四章 近世の松山』 『松山町史』 pp.185~429 松山町
- 山内幹夫ほか 1989 『国営請戸川農業水利事業遺跡調査報告 中平遺跡』  
福島県文化財調査報告書第 208集
- 結城慎一ほか 1985 『仙台城三ノ丸跡発掘調査報告書』 仙台市文化財調査報告書第76集
- 渡辺 誠 1983 『第6章第3節焼塩壺』 『平安京土御門烏丸内裏跡 - 左京一条三坊九町 -』  
pp75~90 (財)古代学協会
- 1985a 『物資の流れ - 江戸の焼塩壺』 『季刊考古学第18号 特集 江戸時代を掘る』  
pp.42~47 雄山閣
- 1985b 『焼塩』 『講座・日本技術の社会史 第二巻 塩業・漁業』  
pp.312~329 日本評論社

# 写 真 图 版



寛永年間の絵図



天和元年の絵図

写真図版 1



SB101・102・SD101  
(北から)



SB104~106  
(東から)



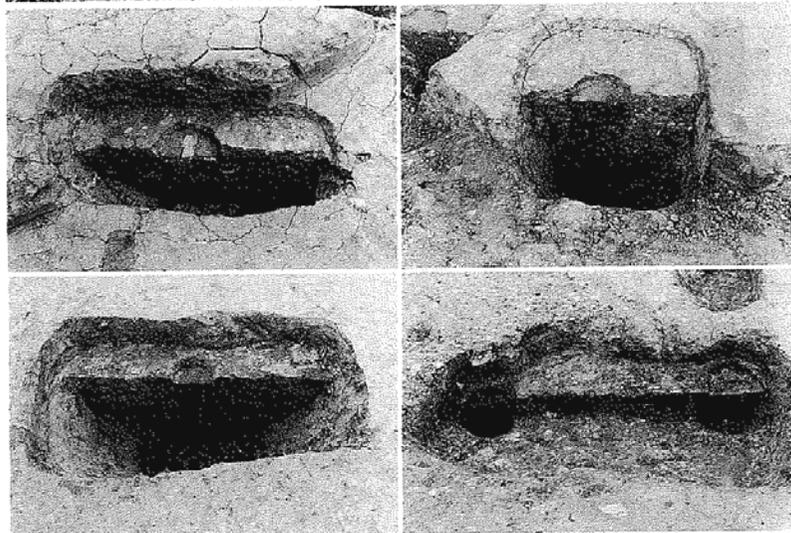
SB104~106  
(南から)

写真図版 2

SB107  
(西から)



左上 SB103南桁中央  
の柱穴  
右上 SB105南桁東側  
の柱穴  
左下 SB107東側中央  
の柱穴  
右下 SB107西側南隅  
の柱穴



S A102.103  
(北から)





SD101  
(北から)



SB108の一部と周辺の  
ピット等 (西から)



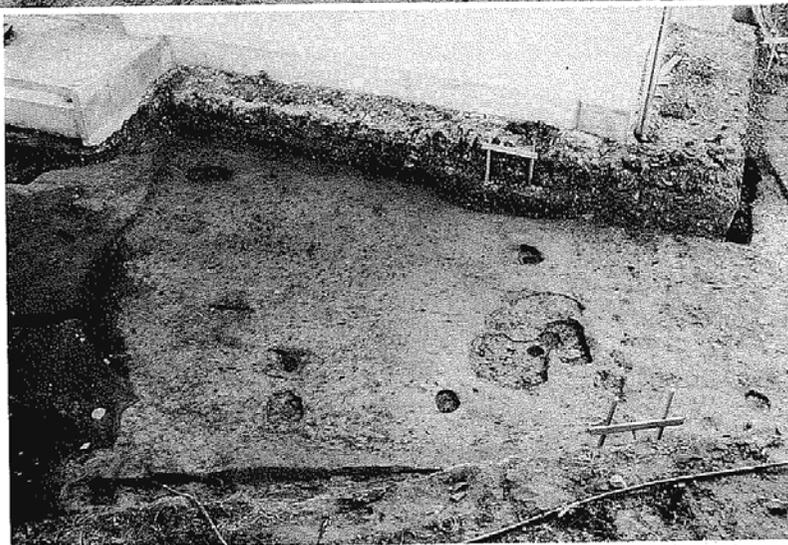
SA104  
(南から)

写真図版 4

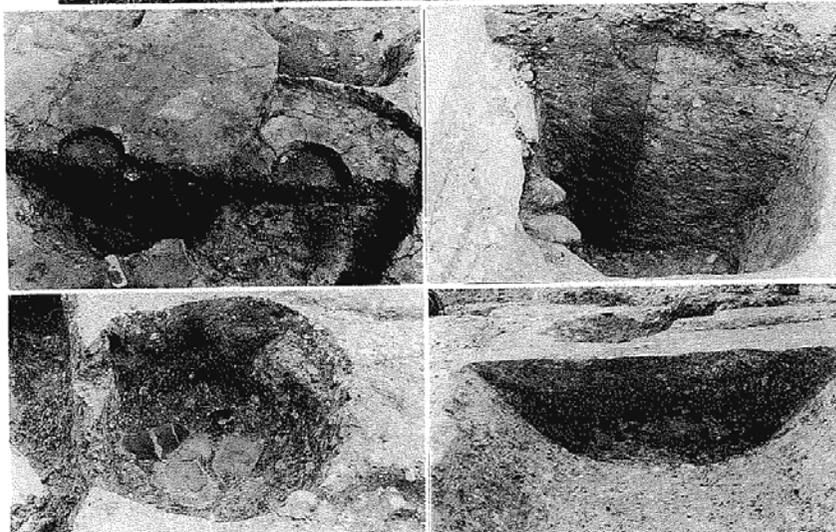
SA105・SB109・SE104  
(南から)



SX103  
(北から)



左上 SB108東桁柱穴  
右上 SA104北側柱穴  
左下 SK102  
右下 SD09断面



写真図版 5



SX104  
(南から)



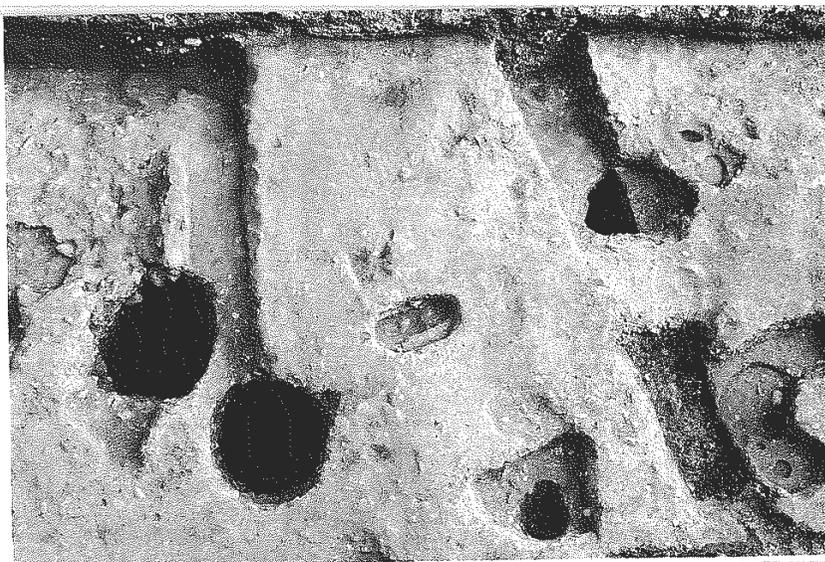
SX104堆積土  
(西から)



SA106・107  
(西から)

写真図版 6

SE102・103  
(東から)



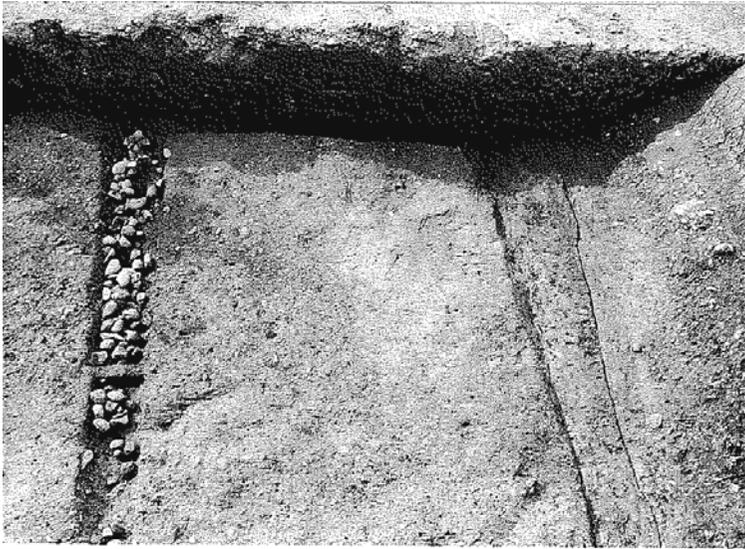
SX114整地層  
(北から)



SA108  
(東から)



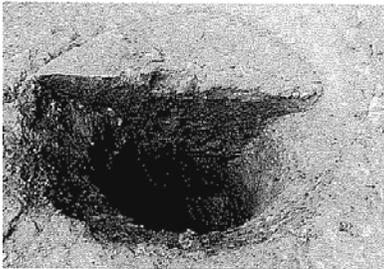
写真図版 7



D-4区SX04道路跡  
(東から)



D-4区SX04道路跡  
(西から)

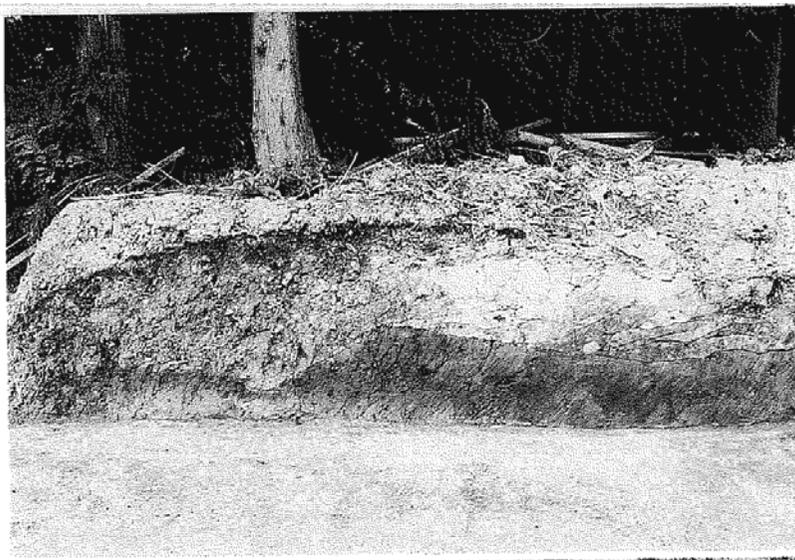


左上 SE103  
右上 D-3区SX04東側断面  
左下 D-4区SX04北側の段  
右下 D-4区SX04西側側溝

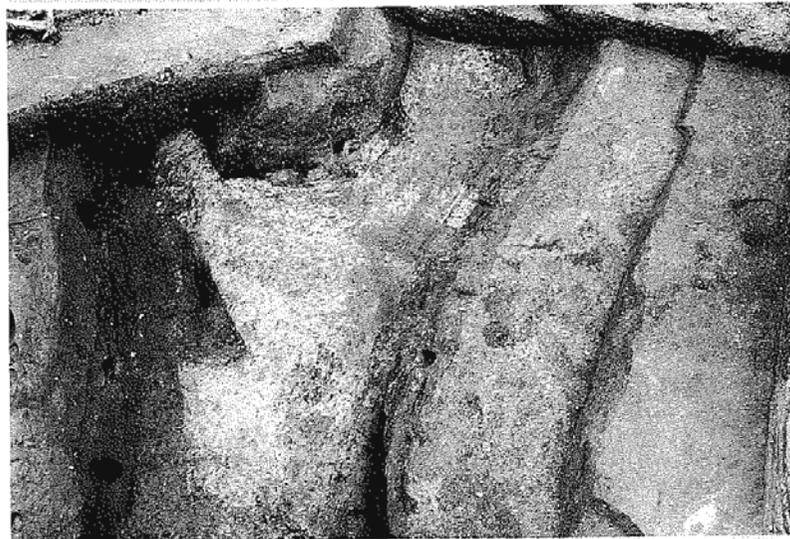


写真図版 8

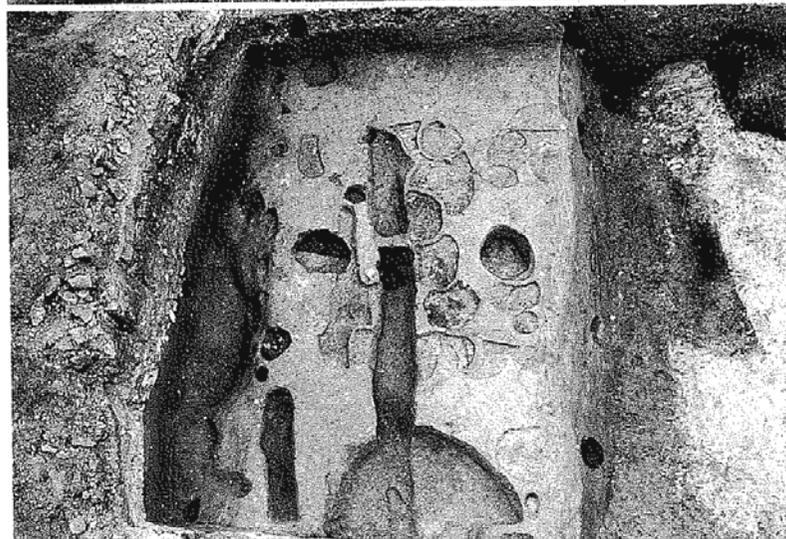
SX115土塁  
(東から)



SD15  
(東から)



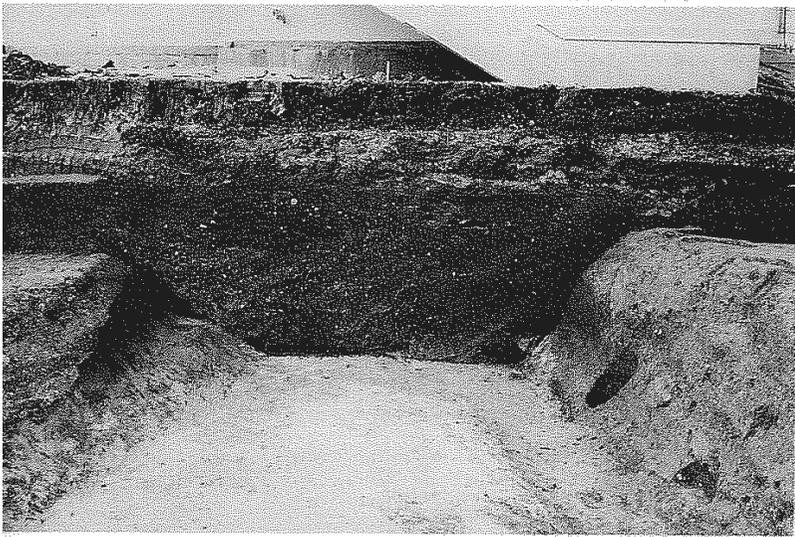
SD15南側平坦面  
(東から)



写真図版 9



SD15精査状況  
(南から)

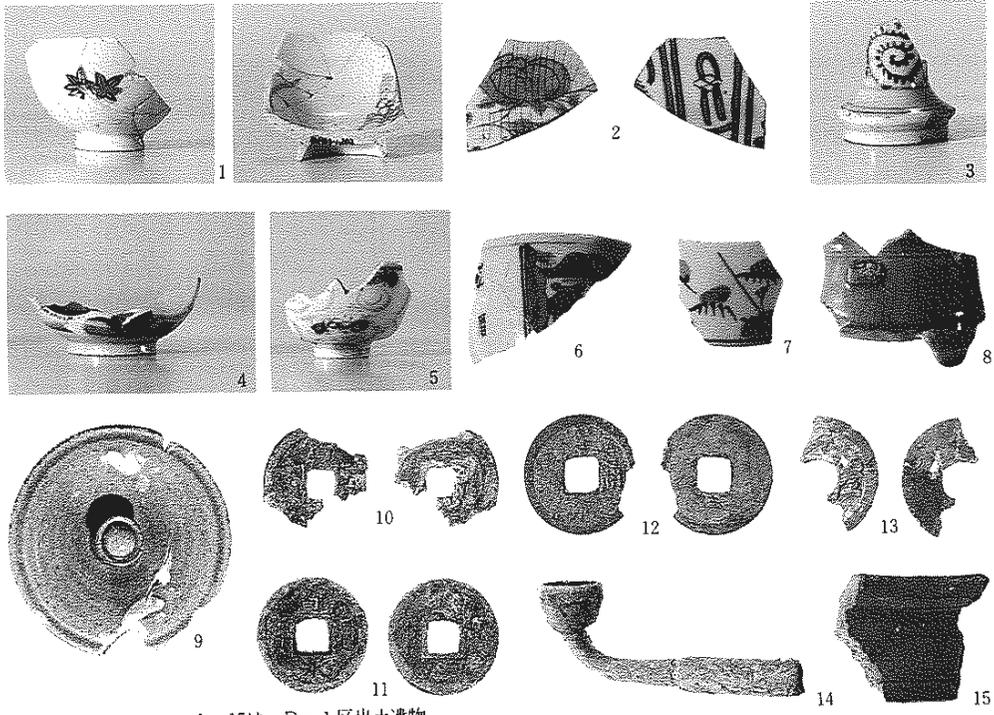


SD15東側堆積層  
(西から)

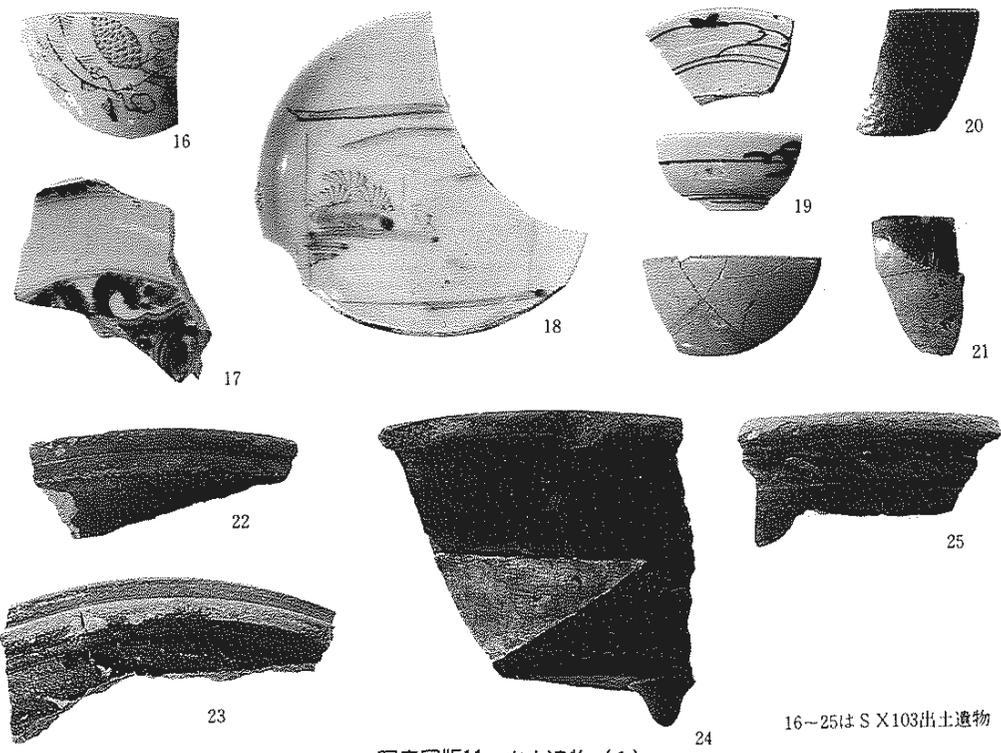


SD105・106  
(西から)

写真図版10

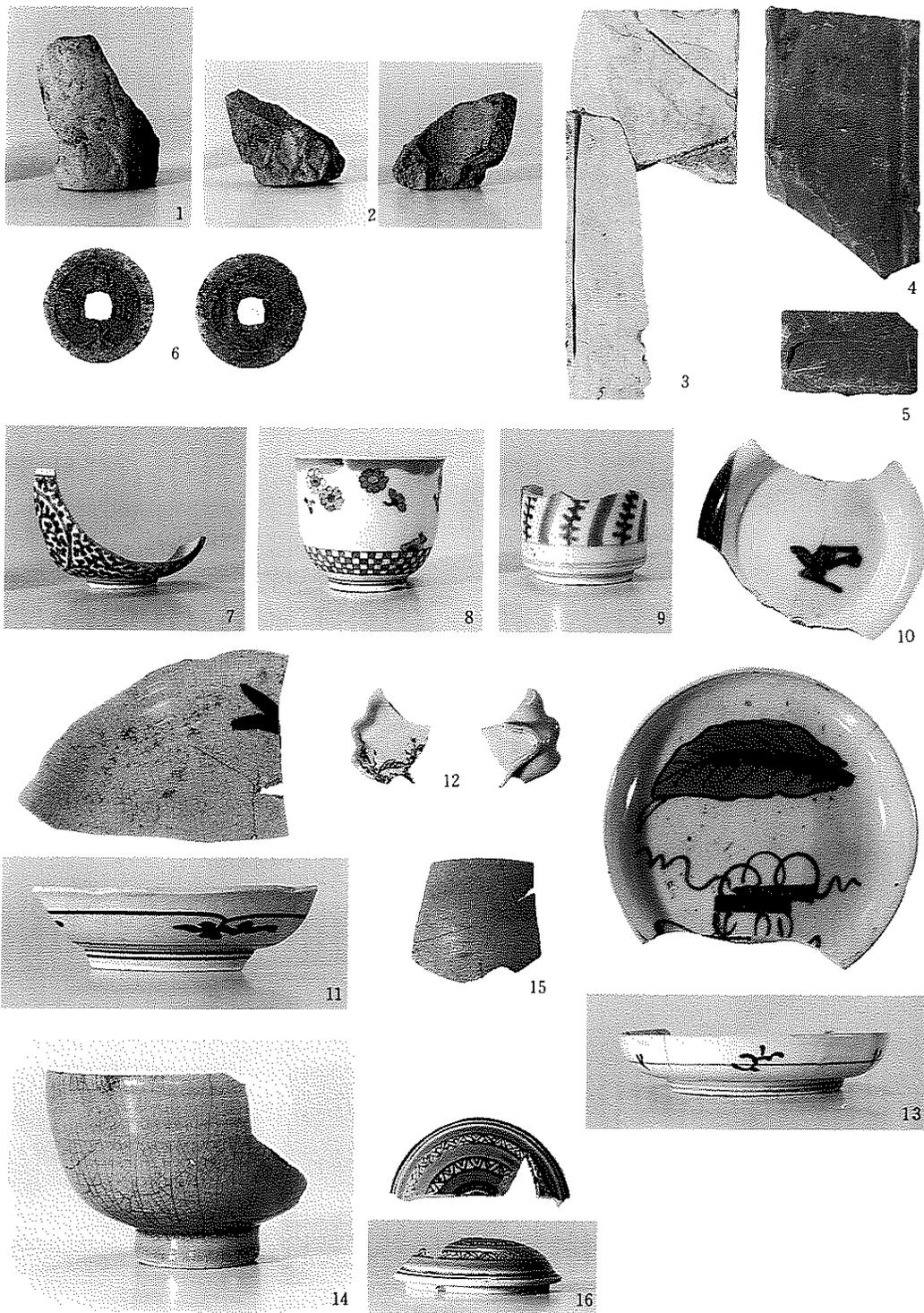


1～15は、D-1区出土遺物



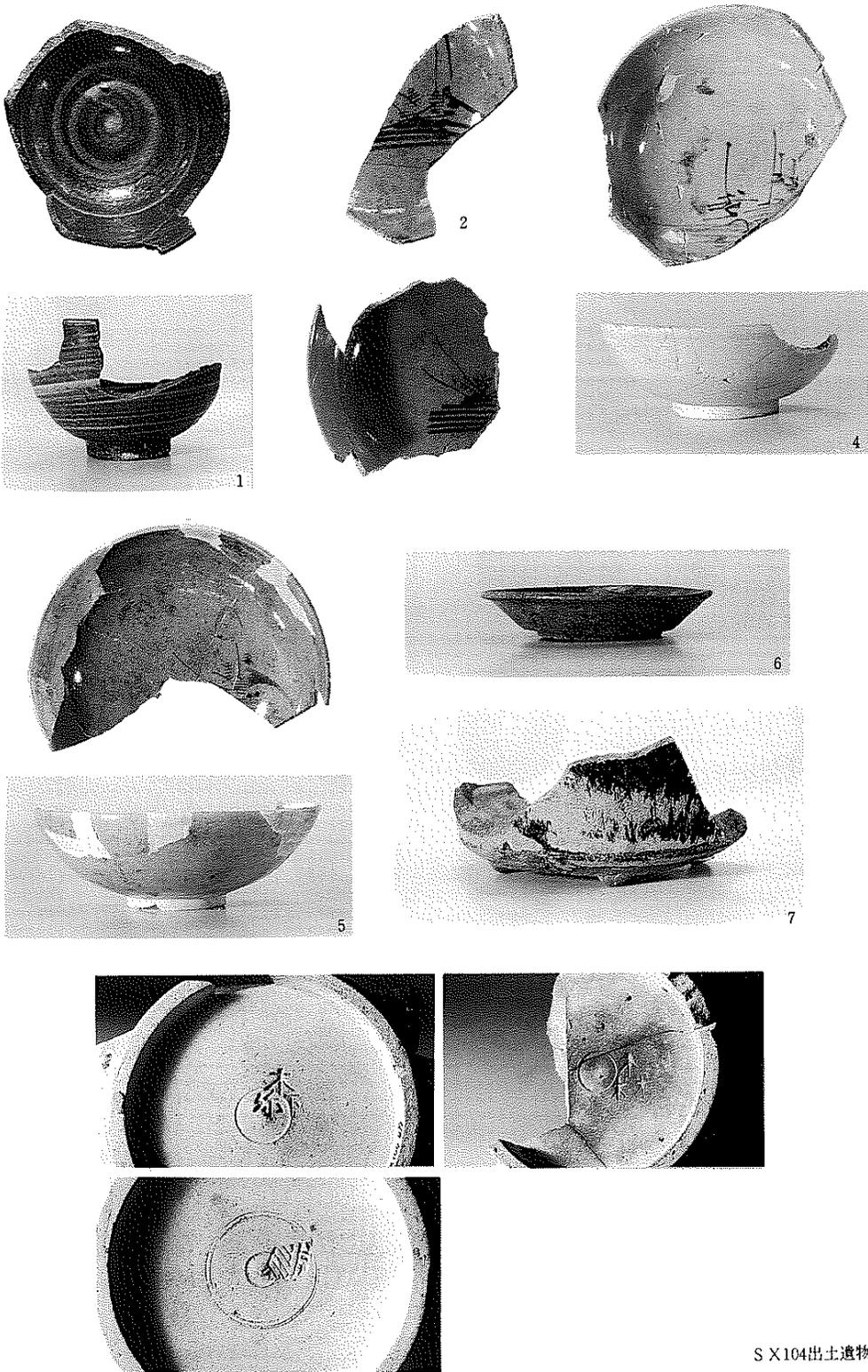
16～25は S X 103出土遺物

写真図版11 出土遺物 (1)



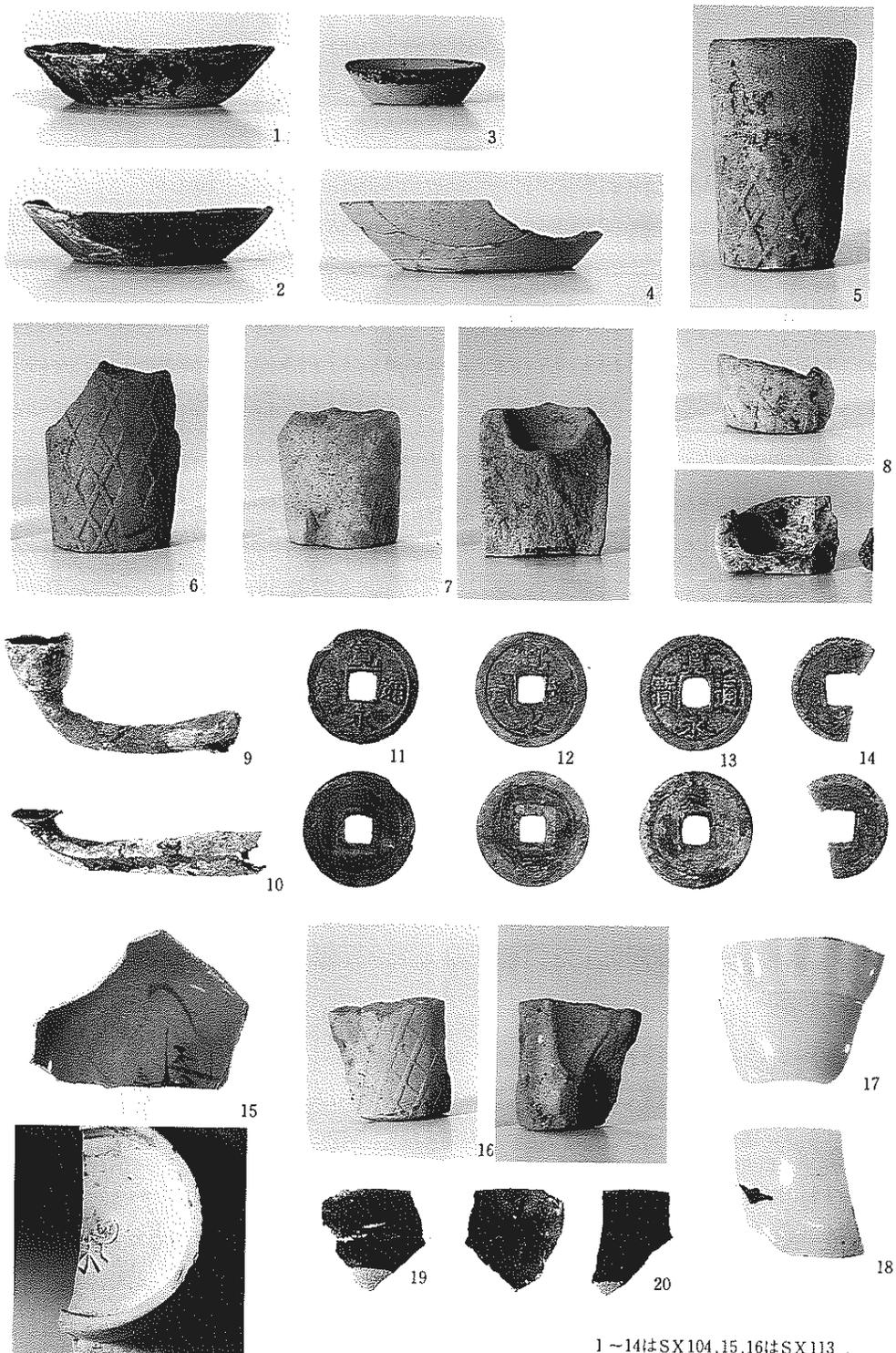
1 ~ 5はS X 103出土遺物  
6 ~ 16はS X 104出土遺物

写真図版12 出土遺物 (2)



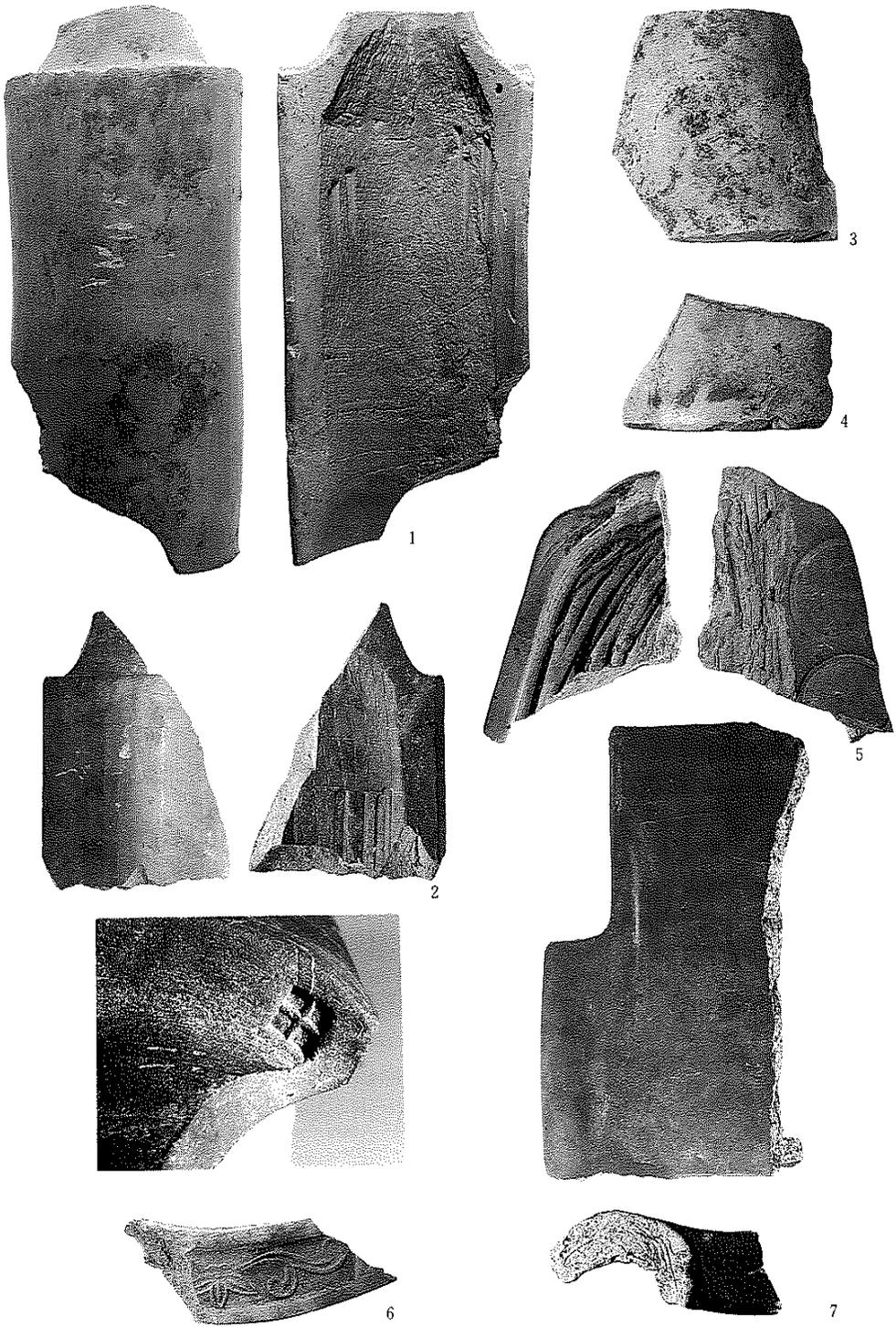
S X104出土遺物

写真図版13 出土遺物 (3)

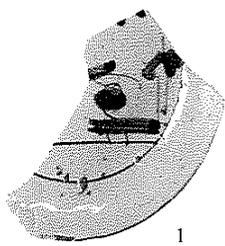


1~14はSX104,15,16はSX113 ,  
17,18は, SE101, 19,20はSX114上面

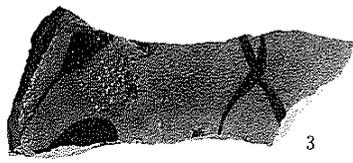
写真図版14 出土遺物(4)



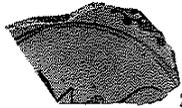
4はSX 04, 6はSX 113, 7はSB 109, 他はSX 104出土遺物  
写真図版15 出土遺物 (5)



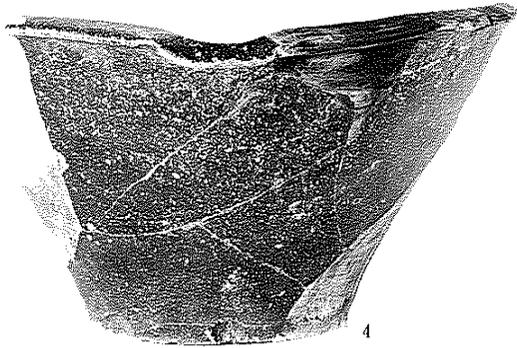
1



3



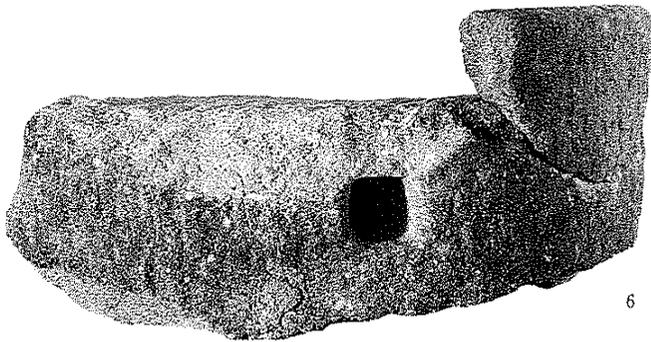
2



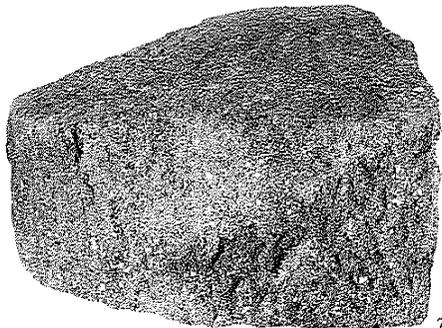
4



5



6



7

5は土塁  
その他はS×04側溝

写真図版16 出土遺物(6)